～東方永憑夢～

黒神猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
～東方永憑夢～

【Ｎコード】
Ｎ０４１８Ｏ

【作者名】
黒神猫

【あらすじ】
自らの過去を失った青年、天草竜一。
彼は失った記憶に導かれ、幻想の地に足を踏み入れる。
そして時を同じくして幻想郷では一つの異変が起きようとしていた・・・
それは３００年という長い時の間眠っていた大きな異変。止まっていた運命の歯車が動き始める。

プロローグその１　～初めての出会い～（前書き）

ニャオー（≧ω≦）／

この作品はあくまで俺が知ってる知識の範囲で書かれている小説です。
キャラ設定が違うとか、なんかおかしいとか、ＮＯＯＯＯ！とか色々不快な思いをさせるかもしれません。
それでもよろしければ読んでやってください。

無理な人は左上のＭＯ　ＤＯ　ＲＵボタンにクリックすることをオススメします。

プロローグその１　～初めての出会い～

これで終わりのはずだった。

だが、目の前に広がるは絶対絶命の状況、打破できぬ戦況が展開されていた。

最初の遠吠えを聞きつけてやってきたのであろう。
次々と現れる、獣ども。その数はすでに２０を上回り、なおも増え続ける。

俺は怪我を負った左腕を庇いながら、右腕のみで刀を構え距離を空ける。
逃げることはできなかった。
すぐにでも飛び掛ってくればなんとできたかもしれない。だが、獣どもは俺を囲むように動き、その輪を徐々に縮めていく。
こいつらは群れで狩るもの、たとえ有利な状況だとしても確実に相手を仕留めようとする。
そのことが俺にとっての不運だった。

いつしか獣どもはその数を３０程に増やし、俺に襲い掛かろうと殺気を込めた目で俺を射抜く。

この場を切り抜ける方法を思考するも、すでに俺に手は無かった。

ただ・・・俺が幸運だったのは、たまたまそいつが通ったことだ。

「すごい数の妖怪だな。」

どこか間の抜けた声が響き渡り―
そして、突如広がる光の弾丸。
弾丸は数を増やし弾幕となり、四方八方に広がり疾駆する。
その光景は、まさに幻想。
弾幕はその美しさ魅せるように飛び交い、そして確かな破壊力を秘めていた。
たとえ、この数多の内の１つにでも当たることがあれば無事ではすまない。
それは、あの弾丸に当たってしまった獣達が物語っている。
数多に広がる弾幕は、避わしそこねた獣どもを射抜き霧散していく。
時にしてほんの数秒、俺の目の前にいた８匹の獣どもが全滅したところで弾幕が止み、そこにスキが生まれた。
これは唯一無二のチャンス、この状況を打破する最後の手段。
痛む左腕を無視しながら、全速力で獣どもにできたスキを駆け抜ける。
呆気にとられていた獣どもはエモノが逃げようとしたことに気づき、駆けてくるが・・・
　悪いがあんたらのエサになるつもりは無い！
俺はさらにスピードを上げ、包囲網を抜け出す。
後はどうにかしてこいつらを撒くだけだが・・・
「・・・ッ！」
左腕が悲鳴を上げ、俺の思考を妨げる。

付け加えるなら、俺の精神はすでに限界を迎え、虚脱感に襲われていた。
いつまでも逃げ続けられるわけがないのは、誰が見ても分かることだろう。

それでも・・・・！

走り続けるしかなかった。
だが、そこに・・・

「もう少しだぜ、なんとか逃げ切れ！」

さっき聞こえてきた声が響きわたる。
その声には先ほどのような抜けた感じは感じられず。どこか力強く、身を任せてもいいと思えた。

言われた通り駆けるとそこは他とは違い少し拓けて、そこに一人の少女が立ち、悠々と構えていた。
俺は目の前に少女がいるということに、ここで獣の食い止めなければならないと思考するが、彼女からはなにか強いものを感じ彼女の方へ駆けることに決めた。

そしてこの選択は間違っていないと、確信できていた。

彼女の隣まで駆けると踵を返し、刀を構える。

「いい判断だったぜ」
そう言ってくる彼女はミニ八卦路を取り出し、構える。
「どうするつもりだ？」
その問いに彼女は確かな力を込めただ一言

「弾幕はパワーだぜ！」
そう彼女は、俺に向かって笑みで返してくる。
その笑みはどこか安心できそして、見とれる程に―
艶やかだ。

プロローグその1　～初めての出会い～（後書き）

どうも、初投稿＆初執筆ということでドキドキのニャンコですw
うまく書けるといいんだけどなかなかキャラ崩さす書くのって難しい・・・
みんなの好きなキャラとかの崩壊とかさせなきゃいいんだけど・・・
俺なりに頑張ってキャラ崩壊を防ぎますね（、・ω・´）
んで、今後の展開なんだけど・・・正直、先の展開を全然まとめずに書いちゃったんでgd gd感があると思うんですがそれもこれから直せていけたらいいなぁ～って思ってます。

もし、感想とかもらえるようであれば是非参考にさせていただきますね＾＾

でわでわ～
バイニャー（≧ω≦）ノシ

プロローグその2　～決着、怒涛の閃光　神速の抜刀～（前書き）

ニャオー（≧ω≦）／
遅くなってしまったぜ・・・まぁ、俺だし仕方ないね（－ω－ｌ）

～前回のあらすじ～
・妖怪たくさ～ん
・とにかく逃げちゃえ（（（（（（（（（（（　・ω・）コブーン
・誰かキタ――――（ °∀ °）――――！！

プロローグその2　～決着、怒涛の閃光　神速の抜刀～

「さて・・・ワンコロ達のお出ましのようだぜ」
そう言いながら竜一は、先頭で森を駆け抜けてくる獣を見据える。
「・・・ふぅぅぅ」
一度息を吐き、呼吸を整え、精神を統一する。

　とにかく出鼻を挫いてやるか！

そう思い、今にも駆け出そうとするが・・・
「あんたは、下がってな」
その言葉が竜一の足を引き止めた。

「さっき逃げ道作ってくれたのお前だろ？
　あれだけの技は準備がいるんじゃないのか？時間稼ぎ位ならしてみせるさ」
８匹もの数を一瞬で仕留めてしまうような技だ。ただで連発できるとは思えなえなかった。
まして、竜一はここに来て間もなく、ここでの戦いを知らないのである。ただの弾幕ですら大技に見えても仕方ない。
実際、今から使おうとしている技は、彼女にとって大技であった。
だが・・・
「準備なら、とっくに出来てるぜ。」
そう言う彼女の顔はどこか昂揚しており、竜一にはその瞬間を待ち望むかのように見えた。
「そうかい。なら、先手は任せるとするが・・・」
この時、竜一が心配したのは獣との距離だった。
獣達は木々を抜けた辺りでスピードを上げ、今に喰らいついてやると言わんばかりの勢いで駆けてきているのだ。

これ以上は無理だ、間に合わない。
そう思い。彼女の前に出ようと一歩踏み込む。
その瞬間━

恋符
「マスタースパーク」

何の前触れも無く、爆音掻き鳴らし、彼女の持つミニ八卦路から大威力の超極太の光が放出される。
なんと表現すればいいだろうか・・・その光は純粋な『パワー』『破壊力』を形にして、全てを貫く怒涛の閃光・・・とでも言えばいいのだろうか？
とにかく、そう言いたくもなる程の威力だ。

彼女の横に立っていた竜一の服を激しくはためかせ、その光は常識という概念もろともすべてを吹き飛ばしてゆく。
光が収まる時には、目の前まで迫っていた獣どもの姿は消えさり、周囲の木々はさっきまでの様子が嘘のように薙ぎ倒されている。
その様子は、さながら大型の台風でも直撃してしまった後のようにも感じられる。

「ヒュ～。正直数匹は残ると思ったが・・・まさかここまですげぇとは思わなかった」
「それほどでもないぜ」
彼女はこちらに向くと、言葉とは裏腹に自慢げに笑う。

カチン━
刀を一度振るい、鞘へと収めながら尋ねる。
「自己紹介がまだだったな・・・俺は天草竜一。アンタは？」
「私か？私は霧雨魔理沙。
この森に住む普通の魔法使いだぜ。」

魔法使い。それは竜一には聞きなれない言葉で魔法使いだというだけで、すでに普通ではなかった。
「そうか・・・じゃあその格好はコスプレってわけじゃなかったのか・・・
それに魔法使いってことならさっきのも納得なのか？」
そう、魔理沙の格好は黒のトンガリ帽子、黒いドレスのような服に白いエプロン、それに綺麗なウェーブのかかった金髪がよく似合い、さらに言うなら左手に持つ箒が独特雰囲気を醸し出す。その姿はまるで童話で出てくるような魔女をイメージさせる物だった。
今の今まで、ただのコスプレだと考え触れないでいたが、実際に魔法使いだと言うのだ。
そんな反応が意外だったのか魔理沙はポカンと口を開け、そして笑う。
「竜一は驚かないんだな」
「は？・・・いやこれでも驚いてるさ」
「そうは見えないぜ」
そんな彼女が、どこか楽しそうに見える。
「・・・はぁ、こんな後だってのに、魔理沙は楽しそうだな」
そう呆れ気味にいってが・・・
「あぁ、楽しいぜ」
魔理沙は動じた様子も無く言ってのける。

きっとこいつは俺と同じタイプだ

そう思うと、なおさらどうしようもなく思えてくる。
「・・・たく」
そう呆れた風に言う竜一の顔も、笑みが浮かんでいた。

「っと・・・礼がまだだったな、わざわざ助けてもらってわる・・・・・」
「どうした？」
急に黙り、気を張り巡らせる。
「1匹か・・・賢いワンちゃんだ！」
そう言い放つと同時に、獣が追いかけてきた方向とは反対の方角に駆け出す。

「高天原に神溜まり坐す　皇が親神漏岐神漏美の命以て八百万神等を神集へに集へ給ひ」
そう唱える竜一の精神が集中されていき、血が昂揚と沸騰する。少しでもしくじればそれは死へと直結する。
なのに、どこか楽しいとも感じてしまう。

一定の距離を超えると同時に木々の間から1匹の獣が飛び出す。
竜一達が逃げ出したら不意を突くつもりだったのだろう。だが、追ってきていた獣どもは消滅し、奇襲も竜一にバレた。
となれば選択は逃げるか、迎え撃つかの二つに絞られる。
そして獣は、向かってきているのが竜一だと分かり迎え撃つ方を選んだのだ。

獣が姿を現したことによって、魔理沙もそのことに気づいたが少し遅かった。

すでに獣と竜一の距離は後わずかで、そもそも弾幕を放とうにも直線上に竜一がいるのだ。
「竜一！下がれ！」
そう言うが、竜一には何も聞こえない。
すでに集中は明鏡止水の域へと沈め、敵の呼吸を掴むそれだけに集中する。

やがて獣が竜一の間合いに入り込む。だが、竜一はまだ刀を抜こうとせず、そのまま獣の間合いへと踏み込む。
獣は喉元に噛み付かんとばかりに、獣ならではの脚力で跳ぶ。
だが、それを左足を軸に回転し、獣を往なす。
そして━
「つぇえい・・・っ！」
その回転の動作はただ避けるだけのものではなく、反撃の一撃を放つ布石。
「・・・っ！」
左腕が痛む。
　だが・・・ここ決めなければ死ぬのは俺だ！
親指で鍔を押し広げ、一撃を放つ。

我流攻式　弐の型
渦龍閃（うずりゅうせん）

相手を往なしてからの抜刀術。
言ってしまえばそれだけだ。
だが、その速度は常人のそれとは異なりすでに神速の域へと達している。

その一撃は下から上へと獣の胴を斬り裂いた。
獣の胴からは血が噴き出し、そのことで自分が斬られたのだと意識をし悶え苦しむ。
その姿はまだ死にたくないという、生への執着、死への抗い。
やがて獣は動かなくなり、絶命したのだと物語る。
「・・・・・・悪いな」
そう言い、竜一は獣の前に膝を着き手を合わせる。
同情したわけでも、殺したことに負い目を感じたわけでもないが、せめてこうして送ってやりたい、素直にそう感じたのだ。

優しいやつ―
この時魔理沙が思ったのは、ただの人間が妖怪を倒したことでも、竜一の剣の腕でもなく、ただそれだけだった。
そんな竜一を魔理沙はただ見守っていた。

「悪いな、嫌なとこ見しちまって」
そう誤る、竜一は笑っており。その笑みが魔理沙にはどこか悲しく見えた。
「いや・・・気にして無いぜ」
なにか気のきいたことでも言ってやれればよかったのだろうが、なにも思いつかずただそう答えるしかなかった。

「そうか、そう言ってくれると俺も気が楽だ」

そう言った竜一は、体のバランスを崩し前に倒れる。
「おい、無理すんな。どこか痛むのか？」
魔理沙は竜一の傍に駆け寄ると、怪我を確かめていく。
あいにく致命傷は一つも無く、左腕の怪我が目立つ位だろう。その怪我も見た目程たいしたことは無くちゃんと治療すれば数週間で完治できるものだ。

「・・悪い・・・少し・・・疲れた・・・・・・」
そういい終わるころには竜一は意識は深くへと沈んでいった。
「おい、竜一？・・・・りゅ・・・・」
「スー・・・・スー・・・・」
「・・・・・はぁ・・・・まぁ寝かしといてやるぜ」
竜一が意識を失ったことで動揺したが、ただ寝ているだけだと分かると呆れ返ってしまった。
そんな竜一を見守る魔理沙の顔にはまた笑顔が戻る。

プロローグその2　～決着、怒涛の閃光　神速の抜刀～（後書き）

書いてる途中で寝落ちしたり＼（＾ｏ＾）／ｗｗｗ
ゲームをしたり＼（＾ｏ＾）／オワタｗｗｗ
いや～なんというか・・・なにやってんだ俺ｏｒｚ
おかげで考えてた内容を思い出す作業から始めることになるし・・・
まったく、まったく！

ところで・・・次話投稿って現在の文字数とかって確認できないんだね・・・
今何文字か分からないのは地味に苦労だぜ。

まぁそんなことは置いといて・・・さてさて、今回の話はどうでしたでしょうか？
竜一君は戦える子なのですよ！弾幕撃てないから、接近戦のみですけど・・・
いやまぁ正直技名なんていらん！って考えてたんだけど書いてたら思いついたのでそのまま使ってみた！厨二要素爆発ですねｗ
まぁもしこれミスったって感じたらすぐ編集で消すのでそこら辺はご勘弁を～ｏ（＿＿）ｏ

そして、その1はすべて俺で通していたのに、その2からは竜一に変わっているのに違和感を感じた方がいるかもしれません。
と言うのもその1は竜一目線で書き、その2からは俺の目線って風にしてみたからです。
ずっと竜一目線ってのもどうなのかなぁ？って思ったのでこれからはこの書き方でいこうと思うのでよろしくです。
まぁともあれ、とにかくこれでプロローグは終わりです！

これからどうしていこうかなぁ～って感じですねw

でわでわまた次回でお会いしましょう。

バイニャー（≧≦）ノシ

番外編　～設定そして続く新章へ・・・ってそれは無いぜとっつぁん～（前書き

※今回はキャラ設定だけなので見なくても本編に影響はありません。

番外編　～設定そして続く新章へ・・・ってそれは無いぜとっつぁん～

にゃんこ
「ニャオー（≧ω≦）／」

にゃんこ
「今回は竜一のプロフィールを紹介＋俺の自己満足ということでやっていきたいと思うぜ！
というわけで・・・さっそくだが、竜一よろしく～」

竜一
「おう。
それじゃ、プロフィールどどーんと公開だ！」

～天草竜一　プロフィール～

名前：天草（あまくさ）　竜一（りゅういち）
誕生日：7月7日←記憶がないため勝手に決めた
年齢：２１才
身長：１７６ｃｍ
体重：５９ｋｇ
趣味：読書
特技：大抵のことはそつなくこなす
能力：剣術を扱う程度の能力
好きな物：仲間と過ごす日々
嫌いな物：退屈

容姿：右目が鮮紅色、左目が金色のオッドアイ、青を帯びた銀髪が腰まで伸び、女顔で美しい容姿をしている。
　黒い服にジーンズを好んで着用し、必ずどこかにシルバーアクセサリーを着けている。

本作の主人公。
刹那的快楽主義者で普段の素行や言動に問題があるが、誰よりも仲間や他人を思いやる優しい性格の持ち主。
なによりも仲間を大切にしており、危害を加えるものには冷酷なまでに非情な一面をみせることもある。
また、仲間を大切に思うがゆえに弱みを見せたがらず、一人で抱え込もうとしては周りを困らせることがしばしばある。
意外と負けず嫌いな所がある。

記憶が無いのはあくまで自分自身に関することで、色々な技術や剣術についての記憶はのこっている。
我流の剣士ながらも、その実力は若くして達人の域にまで達していると言われており。周りからは『剣帝』と呼ばれれている。
戦闘スタイルは、スピードを生かし相手の予想を裏切る動きからのトリッキーな攻撃をする。
容姿ゆえに、女扱いされることがあるが竜一はそのことをあまり好くは思っていない。

竜一

「こんな感じでいいよな？」

にゃんこ
「いいんじゃね？思いついたら編集で書き足せばいいしw」

竜一
「ちなみに、俺の名前はにゃんこが昔使ってたHNで今も気に入っているから使ったってのが真相なんだぜw」

にゃんこ
「そんなことわざわざ言わなくてもいいじゃん！」

竜一
「まぁいいじゃんw」

にゃんこ
「よくない！」

竜一
「ほらほら、そろそろ予告に移るから俺たちは消えねぇと」

にゃんこ
「う～・・・・・ハァ・・・もういいよ」

にゃんこ
「それじゃ、ここから初章の予告ってことで！」

竜一
「なぁ・・・残念だがなぜか知らないが書き込めねぇぞ？」

にゃんこ

「え？あれ？・・・・・なん・・・だと・・・・！？」

にゃんこ

「まさかのオチだな・・・・・・じゃあ次に予告を投稿しよう！」

番外編　～設定そして続く新章へ・・・ってそれは無いぜとっつぁん～（後書き

すぐに読めたら予告としての価値がさがる！って思って空欄あけまくってたら・・・途中で書き込めなくなった＼（＾ｏ＾）／オワタ

ってことで今回は竜一のプロフオンリーでｗ

予告は次話に書くぜ！

東方永憑夢　初章　～夢の狭間編　予告～（前書き）

予告編・・・今度こそちゃんと投稿するぜ！
携帯だと見難いかもしれない・・・（＊・ω・）＊｜　｜）ゴメンネ

※このパートは予告です。読まなくても別に支障はないのでご安心ください。

東方永憑夢　初章　～夢の狭間編　予告～

ー～次回予告～ー

東方永憑夢　新章突入

辿り着きしは願いの集う場所

より深き幻想の地で、

奏でられるデュエット

知ってしまえば―

逃れられない。

始まるは新たな生活

「ふぅ～、こんなもんか～・・・」
ただ古ぼけていただけの家だったが、今ではアンティークな喫茶店、そんなイメージが良く似合う店へと姿を変えたのだ。
「ここからが、俺の第一歩だ。」
そう言った竜一は、これから数々の出来事が起こるっていくのであろうと、気持ちが高ぶっていくのを感じていた。

幻想郷での新たな出会いが、

「あややや、落ち着いてください。
別に私はあなたと襲おうなんて思っていません。」
そう言って、彼女は自分に敵意がないことを表そうとする。
「じゃあ、俺になんのようだ・・・」
そんな問いにそいつは━

「恋愛・・・か？」
そう聞き返すと、彼女は頬を赤らめ小さく頷いた。
「そうです・・・どうか、お願いします」
そんな彼女に竜一は微笑み―
「分かった」
頷いた。

「竜一・・・・・。
困ったらいつでも頼ってきなさい、特別料金で助けてあげるから」
一瞬何を言われたか分からず固まってしまったが、そんなことを言いだす霊夢がどこかおかしくて笑い出す。
「クッククッ・・・ハハハ、なんだよ金とるのかよ」
「あたりまえでしょ、ただでさえ厳しいのだから」

「いい子ばかり・・・だな」
竜一の口から意識せず、ただ純粋に零れ出た言葉に慧音が答える。

「あぁ・・・いい子達だよ。
私にとって、大切な子達だ」
そう言う、慧音の顔はどこか誇らしげで、眩しかった。

竜一を、より強くする。

「でも・・・ぼくは・・・・・・・・幸せになって欲しいんだ。」
竜一の目を見つめ言い放つ・・・
その瞳からは確かな決意と覚悟が篭っていた。
「そうかよ、自分でどうするか決めたんだ。
なら、覚悟し最後まで貫き通してみせろ」
その言葉は厳しくも、竜一なりの優しさが確かに篭っていた。

「俺、幻想郷(ここ)のこと・・・・・結構好きになれそうだ」
そう言って、竜一は、ただ・・・微笑むだけだった。

そして―

「ここ・・・は・・・」
見上げるとそこには夜空が広がり、怪しく光る月の光が地上を照らし上げる。
そんな月光を受け入れるかのように小さな湖はすべてを映し、周りの木々は輝きを放っている。
まさに幻想。
月光に照らされた一つの舞台がここに生まれているのだ。
そして、この光景に魅了されていた竜一は背後にいる存在に気がつかなかった。
「ここは、願いを叶えるために生まれた場所。
・・・・・夢の狭間よ。」
突如、背後から掛けられた声へと振り返り・・・・

言葉を失った・・・・・

東方永憑夢

初章

『夢の狭間編』

―動き始める終焉の夢

ズシャアァーー・・・・ッ・・・・！

「がぁ・・・・・・は・・・ぁ・・・・・・」

その一撃を受けた竜一の喉下からは、朱の鮮血が噴き出される。

東方永憑夢　初章　～夢の狭間編　予告～（後書き）

Ｅｓｃキーにあたったせいで・・・・・全部消えた＼（＾ｏ＾）／
オワタ
後は誤字、脱字探して投稿するだけだったのに・・・まったく、まったく！

さてさて、こんかい予告編ってことで予告を書いてみたんだけど・・・どうかな？
俺は書いてて楽しかったし、これ見直したらストーリ思い出せて今後助かるんだけど・・・
これ見て夢の狭間編が気になってもらえたら幸いです。
・・・けど、つまらなそぉって感じる可能性もあるからね（ー ω ーｌｌ）
予告ってのは諸刃の剣だぜ・・・

それと本音言えば予告編は動画にしてＢＧＭとか文字の出るタイミングとか色々凝ったことをしてみたかったりｗ
まぁそんな技術ないし・・・それだとここに投稿できないからね！
文字だけで伝わることを祈ります！

バイニャー（≧ω≦）ノシ

夢の狭間編１　～えらい人は言いました、逃げることは恥じゃないと～（前書き

ニャオー（≧ω≦）／

夢の狭間編その１です

～前回のあらすじ～

・うおおおお！食らえええ！我が伝説の奥義［飛天○剣流　龍巻閃］！

・わんこおおおおおおおお！。・。・（ノД`）・。・。

・竜一　疲れた・・・寝る・・・

夢の狭間編１　～えらい人は言いました、逃げることは恥じゃないと～

竜一には自分自身に関する記憶が無かった。
思い出せないなら、思い出せないで別によかった。
だが、そのことが竜一に喪失感を与え、それは日に日に強くなっていった。
なにか、なにか大事なことを忘れてるんじゃないか？
そう考えるようになってから、自分の過去を取り戻さないといけないと思い始めた。
竜一の過去に繋がるもの・・・
一つは竜一の持つ刀
そして・・・もう一つは―

（何も見えない・・・）
辺りは白に染まり、音も無く静まり返っていた。
（・・・・あぁ・・・そうか、またコレか・・・）
そんな景色に竜一は見覚えがあった。
昔からよく見る夢。
竜一が気にしてならない記憶の鍵。
本当にこの夢が記憶と通じているのかと聞かれたところで、通じていると証明できるはずは無かった。だが、竜一にはこの夢がなにか自分自身と関係があるはずだと確証していた。
それはただの希望からくる幻影なのかもしれない。
それでも、この夢と刀だけが竜一にとっての過去なのだ。

（いつもならこの後、靄が薄れ森が現れるはずだ・・・そして・・・）
そう考えた最中、辺りの白は薄れていき、そして見渡す限りの森林が現れる。

そこは、どこか神妙な空気に覆われ、何者であろうと立ち入ることができないと感じさせるほどである。そしてそれは竜一とて例外では無い。
（相変わらず・・・進むのを躊躇させる空気だ・・・・・）
だが、そんな空気とは裏腹に一本の道が存在している。
まるで、竜一を森の奥底へと導くかのように・・・
その道だけが周りとは違い、歩けると思える唯一の道。
ゆえに、その道はどこか恐怖を感じさせる。
―進めば二度と還っては来れぬ。
そう思わせるのだ。
「ふぅ～」
二度三度と深呼吸を繰り返す。
（さて・・・行くか・・・）
竜一は腰に帯びた刀を軽く握ると、一歩、また一歩と森の奥底を目指して歩みだす。

３０分程歩いたところでいつもと違うことに気づいた。
（そろそろ彼女がいるはず・・・なんだが・・・？）
彼女―
この辺りでいつも現れる黒髪の女性。
名も知らない女性。
その容姿は雅で美しく、そして・・・どこか儚げで・・・
腕を失って永遠の美を得たミロのビーナスの如く、彼女もまた何かを失っているのかもしれない・・・
それがなんなのかは分からないが、そういった部類の美なのだと竜一は思っていた。

そんな彼女がこんな場所で俺の行く手を阻むかのように現れる。
そして・・・竜一が何を言おうとも、その金色の瞳でじっとこちらを見てくるだけ・・・
その瞳にはどこか悲しみが宿っており、竜一の足を止めさせた。
そして夢から覚めるのだ。
いつもなら―

（いつもと違うな・・・彼女が現れない・・・）
それが何を意味するのか・・・
「・・・・・行くしかないか」
そう呟き、一歩を踏み出す。
だが・・・
ドクン！
「なっ！」
景色が歪みだし、意識が遠のいていく。
（くそ・・・まだだ・・・まだ目覚めるわけには！）

「・・・行くの？」
突如背後から綺麗な声が響きわたる。
振り返ろうとするが竜一にはそれだけの力もだせなかった。
いや・・・なにか不思議な力が働いていたのかもしれない。
だが、それを調べる手立ては存在しなかった。
「あんた、しゃべれたのか・・・」
「・・・辛い選択かもしれないよ？後悔しない？」
「あぁ・・・すでに覚悟してる。」
仲間を置いて、幻想の世界に行った時から竜一は覚悟していた。
そして・・・それは、いまさら揺らぐわけにはいかなかった。
「・・・そうだよね、次にココに来たとき少しだけ話してあげる」
そう言って彼女は用が済んだとばかりに、立ち去ろうとする。
「ま・・・待て！・・・あんたは・・・いったい・・・俺になにを

伝え・・・ようとして・・・いるんだ・・・
お前は俺にとって・・・敵・・・なのか・・・味方・・・なの・・・
・・か・・・？」
すでに意識を保つだけで精一杯ながらも声を絞り出す。
「私は・・・たぶんあなたが・・・・・・・」
そして、彼女の言い終わる前に竜一の意識は闇へと沈んでいった。

「ん・・・むぅ・・・ここ・・・は？」
まだ眠たさが残っているような声を出し、竜一は目を覚ました。
（夢のことは今考えても仕方が無いか・・・・・それにしてもここは？）
周囲を見渡す限りここは寝室なのだろうか？
断定できないのは、寝室というには・・・少し・・・いや、少しというレベルじゃない・・・とにかく散々と散らかっている。足の踏み場がないとはまさにこの状態のことを指すのだろう。
部屋の大部分はハードカバーの古い本で埋め尽くされており、所々に頭蓋骨やら、水晶やらみょんなが色々と落ちている。
唯一綺麗と言えるのは、今竜一が寝ていた周囲だけだろう。
「・・・・・・・・・・・・きたねぇ・・・ってか落ちてる物がおかしいだろ・・・」
（ダメだ・・・部屋からじゃなにも分からん、となると・・・思い出すしかないか・・・）
そう判断した竜一はまだ眠気の残る頭でなんとか眠る直後のことを思い出していく。

（たしか・・・この気持ちの悪い森に来てから、3日3晩寝ずに彷徨って・・・狼を大きくしたようなやつが5体襲ってきたから倒したまでは覚えてる。・・・それから・・・・・大量に集まってきて・・・）

「そうか・・・あの魔法使い、たしか魔理沙だったか？
彼女の前で限界を向かえて寝てしまったのか・・・とするとここは彼女の家か？」

（となると、とにかく彼女を探さないとな）

竜一は布団から身を起こと本の合間を縫って扉へと向かう。

扉を開け、飛び込んできた光景は・・・さらなる混沌だった。
まず、広めの部屋のいたるところに本が転がっている。
部屋の中央には囲炉裏があり、その囲炉裏では土鍋がグツグツと泡を吹いている。

「おぉ、目が覚めたのか」

そんな光景に呆気に取られていると横から声が掛けられた。

「あ・・・あぁ・・・迷惑掛けたな」

「なぁに、気にすることないぜ。
それより、もう大丈夫なのか？急に倒れた時はどうしたのかと思って焦ったぜ」

「あぁ、ずっと寝てなかっただけだからな、それに腕の怪我も少し痛む程度だ。」

そう言って、左腕を軽く振る。

「そうか、ならよかったぜ。
まぁ色々聞きたい事はあるが、まずは夕飯だ。キノコ鍋がちょうどいい具合にできたみたいだぜ」

そう言って、俺に背を向けて土鍋の方へと向かっていった。

「ほら、そんな所で突っ立てないで一緒に食おうぜ」

「あ・・・あぁ、そうだな。・・・じゃあ呼ばれるとするか」

そう言って、竜一は魔理沙の対面に座った。

「へ～、たしかに旨そうだな」
どうやら鍋は味噌ベースで多種多様のキノコと何かの肉、野菜がグツグツと旨そうな音をたてる。匂いもなかなかいい感じで、食欲をそそる。
「だろ、このキノコがまた旨いんだ。一度食べたら癖になるぜ」
そう言って、鍋の中身をお椀によそって渡してくれる。
「そし、それじゃ食おうぜ」
「あぁ」
いざ食おうと箸をお椀へ突っ込もうとして・・・
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
気づいてしまった・・・・・。
傘が人の顔をしているキノコがあることに・・・
（人の顔してる・・・これ、食えるのか？・・・・あっ、笑った）
とにかくなんらかの行動を起こそうと箸で突っついてみると、その表情が苦痛に歪む。
『ダメ、食べないでおいしくないから』
なんて幻聴まで聞こえてくる。
その光景はとにかくキモイとしか表現のしようがなく、今竜一の背に汗がダクダクと流れ出ている。
（これを食べたら、一度死んでも大丈夫・・・なんてこと無いよな・・・）
などと、バカな考えまで浮かんでくる始末だ。
「おいおい、そのキノコが旨いんじゃないか。分からないかなぁ～一度食えば癖になる味なんだけどな～」
無言で人面キノコを突っつきまわしてる竜一を見て、笑うと、魔理沙は自分のお椀から人面キノコを取りひょいっと口の中に放り込む。
「うん、やっぱりこれが一番旨いぜ」

そんな魔理沙の口の中から『ひぎいいいいいいいいいいいいぃぃぃぃいぃいぃぃ』と聞こえてくるのは気のせいなのだろうか・・・
（気のせい・・・だろう、きっと見た目はアレでも旨いに違いない・・・）
そう思い込むことにして、竜一は人面キノコを口へ放り込む。
食感は普通のキノコと変わらず『痛い！ちょ、痛いいいいい！』味もダシをしっかり染み込んで、なおかつキノコの『ひぎゃああああああああああああああああ』旨みも損なっていない。
つまりだ、意外にもこれは旨いのかもしれない。
「・・・・・意外だ、普通のキノコより旨い」
なぜか屈辱的だが、自然と言葉が出てきた。
そんな言葉を聞いて、魔理沙が笑う。
「だろ、コレ食べたら他のキノコが霞んでみえるんだぜ」
確かにそうなのだろう、このキノコは確かに旨い。見た目と絶叫を除けば・・・

「ところで竜一、その格好から見るに外来人なのか？」
その言葉に、キノコを頬張っていた竜一が眉をひそめた。
「外来人？ここは日本じゃないのか？俺はただ森を彷徨ってただけだぜ？」
そんな竜一の言葉に、魔理沙はゆっくりと横に首を振った。
「いや、ここは日本であってるぜ。でも、厳密には違う。日本であって日本じゃない」
その言葉に竜一が首を傾げていると魔理沙は竜一を見据えそっとその名を紡ぐ。
「ここは、幻想郷と呼ばれる場所だ」

〜幻想郷〜

結界によって外の世界から隔離された世界。
その強力な結界ゆえ普通は外の世界からは存在を認識することができない。
同様、幻想郷内部からも外の世界の様子を確認することができない。
何らかの要因で幻想郷に迷い込んでしまった人のことを外来人と呼ぶ。

「まとめると、こんな感じでいいのか？」
「まぁそんなものだ」
いつの間にか少なくなったキノコ鍋に、白飯をぶち込み、キノコ雑炊とする。
「ほら、お椀だしな」
「ん、悪いな」
今度は竜一が魔理沙のお椀に雑炊をついで渡す。
「だが、いきなり話がおかしなことになってきたな。これがアニメとかなら分かるんだが・・・まさか実際体験するとは・・・」
「困惑するのも無理はない。だけど竜一も見たはずだぜ？ここが日本じゃないって証拠を」
確かに見た、というより襲われた。
「あのワンコ集団か・・・」
「そうだ、あれは元はただの獣が妖獣と化したものだぜ
まぁ、普通はあそこまで群れることは無いけどな。精々４，５匹だ」
（やっぱ、あの数は異常だったのか・・・）
そう考えると自分の運の悪さに泣けてくる。
「ま、竜一は運がいいよ。竜一が強いのは見たから分かってるけど、それでも大半の外来人は妖怪に食われて死んでしまう。それに、もう少し東にいたら魔法の森の瘴気に当てられて今頃死んでるぜ。私と出会えたことも運がよかったな」
「東の森・・・それってやけにじめじめして嫌な空気で溢れ返って

る森か？だとしたら俺はアンラッキーだったのかもしれねぇ・・・
まぁ魔理沙に会えたって意味じゃまだマシなのか・・・」
そう竜一が幻想郷に迷い込んで最初に出た場所、それが魔法の森の奥底。瘴気で溢れており普通は人間どころか妖怪ですら近づこうとしない場所である。
「まさか、あの辺りを抜けて来たとは思わなかったぜ。普通なら死んでるぜ、やっぱり竜一は運がよかったんだな」
そう言っていつものように笑う。
「それにしても・・・すんなりと信じたな。普通はもっと混乱したり、喚いたりするもんじゃないのか？」
そんな魔理沙の問いに竜一は苦笑いを浮かべる。
「まぁ、外でも厄介事ばかりだったし、周りの奴等がそもそも変わり者ばかりでな。こういうことは普通の人より慣れてるんだろ・・・」
と、心底嫌そうに答える。
「私からすれば竜一も十分変わり者だぜ」
そんな魔理沙の一言にまた苦笑いを浮かべる。

その後は他愛も無い話をしながら食を進めていった。
そして最後の一杯をよそいながら魔理沙が尋ねてくる。
「で、これからどうするんだ？」
「ん？あぁ、そうだな・・・」
確かに手持ちが刀一本、知り合いはいない。
そんな状況で何ができるのだろうか？
「元の世界に帰りたいなら私が博霊神社まで連れて行ってやるよ」
「いや、俺は俺の意思でここに来たんだ。失くした物を見つけるまではここにいるつもりだ」
そんな竜一の言葉に魔理沙がキョトンとする。

「やっぱ竜一は変わり者だな。
普通は望んで来ようとするやつなんていないぜ」
「そうかもな」
そう言って竜一は笑みを浮かべる。
「なら、しばらくここで過ごすといいぜ。
竜一のことは気に入ったから特別だぜ。」
そんな魔理沙の申し出に今度は竜一の方が唖然とした。
「いやいや、一応俺男だぜ。それも出会ったばかりの。
そう易々と泊めれるもんじゃないだろ」
そう慌てる姿に魔理沙がニヤニヤと笑う。
「へ～、なにか問題になるようなことするのか？」
「いや、しない！絶対にしない！」
「・・・・・そこまで言われるとそれはそれで傷つくぜ」
「いや、だから・・・あ～～～～くそっ！」
竜一は照れくさくなりそっぽを向く。
そんな姿が見れて満足したのか魔理沙はニカッっと笑みを浮かべる。
「ま、行く所ないんだろ。
せっかくの好意なんだから受け取っておくべきだぜ。
それに、本当になにかしようとしたらマスタースパークの餌食だぜ」
しばらく考えた竜一だったが・・・
「・・・・・わかった、世話になる」
と、照れくさそうに頬を掻きながら答えた。

やはり、この幻想郷に来て竜一にとって最も幸運だったのは、魔理沙のような人に出会えたことだったのだろう。
そのことに感謝しながら小さくただ一言
「ありがとう」
と呟いた。

ちなみに・・・この後すぐ、竜一はキノコに当たってしまい数時間に亘り、吐き気と腹痛に苦しむことになってしまうのだが・・・今はその幸せをそっと見守っておこう。

夢の狭間編１　～えらい人は言いました、逃げることは恥じゃないと～（後書き

さて、今回は計５２８９文字。
俺にしては頑張ったほうなんじゃないかと思います。

さて、しばらくはほのぼのパートを続かせるんじゃないかな～と思います。
展開が遅い！ってイライラするかもしれないのですが・・・堪忍な。

それじゃ
バイニャー（≧ω≦）ノシ

夢の狭間編２　～水面下で動き出す者～（前書き）

ニャオー（≧ω≦）／

静かに動き出す者たち
それはこの物語の吉と出るのか凶出るのか・・・
竜一の知らざる所で物語は動き始める

～前回のあらすじ～
・１ＵＰキノコの絶叫鍋～味噌風味～
・『ひぎいいいいいいいいいいいいいいいいい』
・魔理沙の家に滞在決定

夢の狭間編２　～水面下で動き出す者～

竜一が妖怪との戦いで潜めていた気配を放つことによって、ここ幻想郷に踏み入れたことに気づく者が３人。

１人は紅魔館の赤い悪魔・・・
人々が恐れ近づくことのない紅魔館の主にして、永遠に幼き紅い月の二つ名を持つ―

『レミリア・スカーレット』

その二つ名の通り齢５００歳以上にして、その姿はまるで十にも満たないほど幼く見える。
だが、その姿とは裏腹に溢れんばかりの威厳・・・カリスマ性を秘めている。

「・・・この気配は？」
そう呟き、体を起こす。
まだ夕方ゆえ、彼女が目を覚ますにはまだ早い時間なのだが・・・
「・・・ふふ、なにか面白いものが幻想郷に入ってきたみたいね」
幻想郷へ入ってきた１つの気配を感じ取り、目が覚めてしまった。
いつものレミリアなら、愚痴の１つや２つ零して再び眠りに付くのだが・・・
その顔は不満を感じるどころか、どこか楽しげに笑っている。
「咲夜」
そう彼女が呼びかけると、突如一人の少女が現れる。

銀髪を耳まで伸ばした少女。
年の頃は十代後半といったところだろう。
メイド服を着用しており、手にはティーセット一式を持っている。
彼女の名は十六夜（いざよい）　咲夜（さくや）
この紅魔館のメイド長にして、紅魔館に住む唯一の人間。
その家事スキルの高さから、実質的に紅魔館を取り仕切っている。

「今日は機嫌が良さそうですね、お嬢様」
そう言って、持ってきたティーセットで紅茶を用意し始める。
「えぇ、なにか面白いものがここに来たみたいだから」
そう言うレミリアは、まだどこか可笑しそうに微笑んでいる。
「面白いもの・・・ですか？」
「えぇ」
「紅茶が入りました」
入れたばかりの紅茶をレミリアに渡す。
「ありがとう、咲夜」
紅茶をゆっくりと飲む、その動作一つをとっても気品が溢れている。
「私はその面白いものを持ってくればいいのでしょうか？」
「違うわ」
「じゃあお嬢様自身が向かわれるのですか？」
「それも違うわ」
レミリアは咲夜に視線を向かわせ、言葉を紡ぐ。
「生きていればいずれここに来るわ。
そう運命が決まっているのよ。
ただ・・・色々と準備はしておいた方がよさそうね。ふふふふふ」
そうしてレミリアは笑い出す。
いずれ来るそれが私を楽しませてくれると確信して。

死者の行き着く先の一つ、冥界。
当然、死者ばかりの世界なのだが、最近は冥界と顕世を分かつ結界に穴が空き、行き来が安易となっている。
四季が豊かで、春には美しい桜で埋まり、秋には紅葉で美しく染まる。知る人ぞ知る花見の名所となっているわけだ。
だが、やはり冥界。
空気は生者を拒むかのように鋭く、冷たく
そして、何の音も無く静かだ。
それは、死者の国なのだと認識させ、生者に対しての警告を発しているようにも思える。
そんな冥界の最も高い位置にそれは存在している。

【　白玉楼　】

冥界存在する、広大な面積を誇る日本屋敷。
その広さは二百由旬・・・つまり、約１４４０ｋｍと呼ばれており、東京ドームに変換すると約２９個分の広さとこというになる。
また、その広大な庭には桜の木が大量に植えられており春になると見事なまでの桜の海が一面に広がり、広間から眺めた景色は、この世のものではないと言われるほど美しい。
そんな白玉楼の主が・・・

『西行寺（さいぎょうじ）　幽々子（ゆゆこ）』

幽霊を率いる亡霊の姫
「妖夢～おなか空いた～」
気分次第で人を殺してまわり
「ねぇ～妖夢～夕飯は～～」
視線を合わせるだけで死が訪れ
「は～や～く～、怒ると怖いわよ～！畳の上でバタバタするからね～！」
魂を抜き取っては永遠に苦しめ
「よ～う～む～、お～な～か～す～い～た～」
腹が空けば生きたまま食らう
など、悪い噂が絶えないが、それは彼女を知らないから言えることで、先ほどから響く幽々子の声はここが冥界であることを忘れてしまうほど暢気なものだ。
今の彼女を見たらその考えが１８０度変わるのは言うまでもないだろう。

「持ってきましたから！そんな駄々をこねないでください」
そんな幽々子の駄々を聞き、一人の少女が巨大なお盆に料理を大量に乗せて、廊下を駆けてくる。
白髪のショートカットの少女。
年の頃は十代前半ぐらい。
頭には黒いリボンをつけ、深緑色のスカートに身を包んでいる。
腰には二本の刀、一刀で幽霊十匹分の殺傷力を持つ長刀「楼観剣」と、人の迷いを断つ短刀「白楼剣」を帯刀している。
なによりも特徴的なのが、彼女についている巨大な幽霊だろう。傍

から見ると、幽霊に憑かれているように見えるが、彼女は半人半霊・・・つまり、幽霊は彼女の半身なのだ。
彼女の名は魂魄（こんぱく）　妖夢（ようむ）。西行寺家の専属庭師兼西行寺幽々子の警護役である。だが、今の妖夢を見る限り幽々子の雑用係と言った方が正しいかもしれない。

「幽々子様～入りますよ～」
お盆を傍に置き、素早く障子を開ける。
「妖夢、廊下歯走っちゃだめよ」
「幽々子様が急かすからでしょう！
なら、少しは我慢してくださいよ・・・」
中で座っているのは、桜色の髪をした二十台前半ぐらいの女性。
頭に渦巻状の模様のついた帽子を被り、水色の着物で着飾っている。
彼女こそが西行寺幽々子である。
「だって、お腹が空いたんですもの」
そう言って口元を手で隠し、クスクスと笑う。そんな仕草一つとっても、気品が溢れている。
そんな幽々子に妖夢は苦笑いを浮かべながらも、慣れた手つきで食事を並べていく。
それを見る限り、妖夢の苦労は今に始まったものじゃないのかもしれない。

「はい、用意できましたよ」
「ありがとう、いただきま～す」
嬉々溢れる表情で食事を開始する。
上品で気品に溢れた動作で食べる。その動きはまるで一つの芸術のようで、見惚れるものがある。
ただ・・・料理の減る速度が・・・
早い・・・
ものすごく早い・・・

その気品溢れる食べ方で、どうすればそこまで早く食べられるのか不思議に思う。実はお椀の底に穴が開いているといわれても疑わないだろう。
「おかわり」
所要時間3分とちょっと
盆の上に乗っていた、鮭の塩焼き、金平ゴボウなどが今や見る影もない。
「あ、あの・・・幽々子様？せめて、もう少しゆっくりと味わって
「お・か・わ・り！」・・・・・はい」
外に用意させていた幽霊に合図を送り、料理を持ってこさせる。

「幽々子・・・様？」
妖夢は幽々子の様子に気づき、困惑した声をこぼした。
三杯目を食べかかろうとした時、幽々子は急に食べるのを止め窓から外を眺める。
その雰囲気は、さっきまでの暢気なものとは異なり、心の弱い者ならそのまま心が折れてしまうと思えるほどの鋭い威厳を纏う。
この姿こそが白玉楼の主、天衣無縫の亡霊・・・西行寺幽々子の真の姿。
「・・・・・あの子の気配？・・・いや・・・これは・・・・・」
しばらく考えに浸り、一つの結論が出るとさっきまでの雰囲気へと戻っていく。
「・・・・・まぁ・・・なんにせよ、紫が動くわね。
私は様子をみましょうか」
そう呟いた瞬間に幽々子と妖夢しかいない部屋でありながらも別の声で返事が返ってくる。
「もしかしたら動かないかもしれなかったわよ？」
「あら？でも、すでに動いてるみたいじゃない。

それに、あの子に似た気配ですもの、あなたなら動くわ」
そう言って幽々子は、クスクスと微笑む。
「それで、私になんの用かしら？」
幽々子は背後を振り向き、今までいなかったその人物を見据える。
そこに立っているのは、妙な帽子を被った金髪の女性。
年の頃は・・・二十台だと思われが・・・二十代と言われても、十代と言われても納得してしまうだろうような雰囲気を持っている。
ウェーブした美しい金髪が日の光に輝き
白地のフリルの付いた上品なワンピースの上に紫のエプロンのような服を着ており、どこかの令嬢のようにみえなくもない。
特徴的なのが、何も読み取ることができないその金色の瞳である。
それが彼女―
幻想郷を誰よりも愛す、すきま妖怪。

『八雲（やくも）　紫（ゆかり）』

彼女こそが竜一の存在に気づいた最後の一人だった。
「ただ、あなたはどうするのかと思って来ただけ」
「さっき言った通りね。しばらく私は様子を見させてもらうわ」
「そう。じゃあもう一つだけ聞いとくわ・・・
この気配の主がどこにいるか分かるかしら？」
そう問いかける紫の瞳が鋭くなる。
「残念だけど・・・ここからじゃ、そこまでは分からないわね」
幽々子の答えを聞くと、肩を竦める。
「そう、邪魔したわね」
踵を返し去ろうとする。
そんな紫に幽々子が一つだけ問いかける。
「ねぇ紫、もしあの子だったら・・・あなたならどうする？」
その質問に、しばらく黙るも・・・

「どうもしないわ、異変を起こすのならあいつでも容赦しないわ。
それに・・・・・あいつは３００年も前に死んだ」
そう言って、来た時のように忽然と姿が消えた。

「幽々子様、あの子って誰なんですか？」
「ん～、そうねぇ～・・・・生きていたら今頃あなたの良いライバルになっていたかもしれない子ね」
過去を思い出してでもいるのだろうか・・・幽々子は表情を暗くしそう言った。
そんな幽々子から何かを感じ取っていたのだろう、妖夢はそれ以上何も尋ねず空になっていたお椀に白飯をよそう。
「そうだ、妖夢」
幽々子は暗くなっていた表情を引っ込める。
「なんですか？」
「外に出ることがあれば、変わったことが無いか注意しておいてくれるかしら」
「変わったこと・・・ですか？」
「そう、一応気にしておいてくれる？」
「わかりました」
そう、強く頷く妖夢を見て幽々子は先ほどまでの笑顔に戻る。
（あの子が生きているとしたら・・・・・それは・・・・・）
気配について考えてしまう。
だが、傍で一所懸命仕えてくれている妖夢を見ていると、ついそんな気分じゃなくなってくる。
（ふぅ、今は考えるの止めておきましょう）
そして・・・
「おかわり～！」
「はい、どうぞ」
５杯目を食べ始める。

幻想郷最強クラス―
レミリア・スカーレット
西行寺幽々子
八雲紫
それぞれが自らの考えの下に・・・今、水面下で静かに動き始める。

そうとは知らず竜一は・・・

「なんど諦めたか・・・作り始めて4時間半・・・ついに・・・ついに、完成だあああああ！」
なにかをやり遂げたという達成感が竜一の身に宿る。
魔理沙の家に厄介になることに決まった後、用意してもらった部屋の片付けをしていたのだが・・・ただ片付けることに飽きてきた竜一はそれを作ることにしたのだ。
「これは、魔理沙に見せねぇとな！」
一刻も早くこれを見せたいという意思だけが、今の彼を動かしていた。

「魔理沙！おい、魔理沙！」

ノックも無しに勢いよく魔理沙の部屋に飛び込むと、本を読んでいた魔理沙がこっちを見る。
「ん？どうかしたか？」
「いいから来い！今すぐ来い！」
「わっ！ちょっと落ち着け！」
魔理沙の手を取ると、早く早くと子供みたいに引っ張っていく。
「いいから来い！すげぇから！」

「おぉ、おおおぉぉぉ！」
竜一の部屋に戻ってくると、魔理沙の口から感嘆の声が漏れる。
それもそのはず、ただ散らかっていただけの部屋は今や片付いており、そして・・・・・・・
部屋の中心に魔道書を積み立てて作られた一匹の恐竜が雄雄しく立っている。
赤く力強い目
勇ましい両腕
屈強な足腰
本当に本を積み立てただけなのかと疑いたくなるほどの完成度の高さだ。
「魔道書から生まれたドラゴン、マジックブックオブドラゴンの『マブゴン』だ！！！」
「すげぇな！これ本当に本を積み立てただけなのか！？
ってかどうやって積み立てたらこんな形になるんだぜ！？」
「ふっふっふ、すげぇだろ！もっと褒めるがいい！」
その褒め言葉を聞けて満足そうな表情を浮かべる。

「とっ・・・そういえばそろそろ夕飯の準備だよな？気分がいいし俺が作るぜ～」
それでようやく落ち着いたのか、夕方だと言うことに気が付いた。
「あぁそうだな、それじゃ任せるとするぜ。

それにしても・・・本当によく作ったな～正直びっくりした・・・
ん？」
突如、魔理沙の視線がマブゴンの胸辺りで止まる。
そこには、心臓をイメージして一つだけ赤い本を積んでいた。魔理沙はその本をジッっと見ている。
「おぉ！やっぱりこれ探してた本だぜ！」
その言葉を聞いた瞬間・・・竜一に閃光が走った。
それは、死の宣告
マブゴン誕生から3分32秒にして最大の危機
「まっ・・・待て！そこは！？」
「ん？」

バタバタバタバタ

その瞬間竜一の時が遅速する。

マブゴンの頭が落ちる・・・

腕が取れバラバラに・・・

体が崩壊を起こし・・・

足が落ちる・・・

製作時間4時間半にして
マブゴン誕生から3分と42秒その短い命を終えた。
「・・・・・・・・・・・・・・・マブ・・・ゴン？」
現実が直視できない・・・
その死を受け入れることができない・・・
悲しいはずなのに涙もでないのだ。

「・・・・・・・あ～・・・・夕飯は私が作るからな。元気だそうぜ」
「・・・・・・・・あ・・・・ぁあ」
魔理沙に悪気は無い、ましてや助けてもらってる恩人だ恨むわけにはいかない。
その想いが、また竜一を苦しめた。
竜一はその場に膝をつくと・・・
「どうしてだろうな、涙も出ないんだ
まだそこにお前がいるような気がして・・・
お前の分まで、俺・・・強く生きるから・・・そして・・・・」
（いつかまた・・・作ってやるから・・・）
と、強く誓った。

と暢気にも平和を満喫していた。

余談だが・・・その後部屋の片付けに1時間を費やし、もう1時間を掛けてミニマブゴンを生み出し、色々トラブルが起こったのだが・・・それはまぁ、関係ない話だろう。

夢の狭間編２　～水面下で動き出す者～（後書き）

前回から間が空いてしまいましたね・・・どうもリアルの方が忙しかったので（－ω－ｌ）
テスト勉強したりとか、ワンピースやケンイチを１から読み直したりとか、ゲームやったりとか・・・
仕方ないね（´・ω・、）

今回の展開ですが、ゆっくりと物語は動き始めましたね！
どこにどういう風に伏線を入れればいいのかとかわかんないことだらけで、色々悩んじゃったんだけど・・・結局あまり入れてない気がするぜ・・・
使えると思ったところはつかっていきたいけどね！

それと後半のマブゴンネタ・・・正直ミスった感溢れてるけど・・・
俺はマブゴンをこの作品のマスコットにしてみせるぜ！
なぜかって？書いてるうちに愛着が湧いちゃったんだよバカヤロー！書き直すつもりが書き直せなくなっちゃったんだよクソヤロー！
いずれ後悔する気がするが・・・後悔してないぜ！

まぁ今回はこんな感じかな？
それじゃバイニャー（≧ω≦）ノシ

夢の狭間編3　～動き始める歯車～（前書き）

ニャオー（≧ω≦）／

竜一の探す物・・・
それを知った魔理沙の行動とは？

～前回のあらすじ～
・水面下に潜む陰
・紫と幽々子の知る人物とは
・マブゴオオオオオオオオオオオオオオン

夢の狭間編３　～動き始める歯車～

「ふっ・・・・！ふっ・・・・！ふっ・・・・！ふっ・・・・！」
シュン！シュン！シュン！シュン！
朝の６時過ぎ、ようやく日が出てきたという早朝に一定のリズムの呼吸音と風を切る音が聞こえてくる。
森の中のとある店の前に、銀髪を後ろで結い、和服を着た男が、真剣を手に素振りをしていた。
その動作には乱れも無く、彼が築き上げてきた努力とその時がどれだけのものなのか十二分に物語っている。
「ふっ・・・・！ふっ・・・・！・・・・・・１０００！・・・・ふぅ」
それは今も続いており、今の素振りも一時間も前から始めており、ようやく一段落ついたところなのだ。

男は刀を帯刀すると、静かに目を閉じる。
「・・・・・高天原に神溜まり坐す　皇が親神漏岐神漏美の命以て八百万神等を神集へに集へ給ひ」
天津祝詞を一口唱え、柄に手を構える。
すると、さっきまでの空気とはことなり辺りは緊張に包まれていく。
「・・・・・・ツェエエエエイ！・・・・ッ・・・・」
「ツァ！・・・・・ハァ！・・・・」
刀を素早く鞘から抜き放つ動作で横に一閃凪ぐ。
そのまま大きく足を踏み出すと、二回、三回と上下左右へと刀を振るう。
「ッ！・・・・・・・・・ダメだ・・・まだ、これじゃあ幻想郷(ここ)では通じない・・・」
刀の扱いだけというのなら、彼の実力はすでに常人のそれをとっくに超えている。
ただの妖怪程度なら、なんとかできるだろう。

だが、ここは幻想郷・・・弾幕による撃ち合いが主となる。
魔理沙の放つ技を見てそのことを強く実感した。
弾幕が撃てる相手となると、接近しないと攻撃できない刀は致命傷になってしまう。
つまり、刀で戦う以上、なにか飛び道具を使って隙を作り懐に潜り込むか、その致命傷を覆すほどの実力を身に付けるかしないといけない。
そして、現時点で彼はここで通用する飛び道具・・・つまり弾幕を撒くことができなかった。そうなると、残っているのは残り一つになるというわけである。
「・・・・・もっと強くならねぇと」
そう呟きながら、彼は後ろを・・・つまり、店の入り口へと振り返る。
「んで・・・もしかして、起こしちまったか？」
そう言いながら、刀を軽く二回振ると鞘へと収める。

「へ？・・・あぁ！いや、そんなことは無いぜ」
何故だか酷く驚いた様子でそいつ・・・霧雨魔理沙は返事を返す。
なぜだかその顔はうっすらと赤く染まり、照れているようにも見える。
「？・・・ならいいけどよ・・・・・見てたんだったら声ぐらいかけてくれればいいのに」
「いや、そのつもりだったんだけど竜一が・・・その・・・ゴニョゴニョ・・・・・」
そう言って、魔理沙は口篭り、下を向いてしまう。
「ん？んん？？？」
そんな魔理沙の様子に混乱してしまう・・・
（俺が・・・何かしたか・・・？）
そう考え、思い返してみるも特に思い当たることは無い。
しいてあげるとしたら、昨日のマブゴン事件くらいだろうが・・・

関係は無さそうだ。
そう、竜一が思考に沈みかけていると、突如魔理沙が顔を上げると竜一の方へと歩み寄ってくる。
（ん～？？？）
意味も分からず、ただ棒立ち状態になる。
魔理沙はそんな竜一の前まで来ると、今度は竜一の顔から足まで体の隅々を見る。
その口からは「それにしては・・・」「いやでも・・・」と呟きが漏れる。
そして━

ペタペタ　ペタペタ

「・・・・・・・・・・・・・」
竜一の胸へと手を伸ばすと、ペタペタと触りだす。
「・・・・・・・・・・・・ナニヤッテンダ？」
そう呼びかけると、ようやく魔理沙は竜一の顔へと視線を向ける。
「いや・・・実は女だったって可能性があるのかと思って」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「いや、もちろん男だって分かってたぜ！けど・・・その格好で素振りしてるお前があまりにも綺麗だったから・・・つい、な」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
言葉も出ない。
華奢な体つき、整った顔立ちゆえ、外の世界でもよく女と間違われていた。
だから慣れてはいるものの、やはり竜一にとってはあまり嬉しいと思えることではないのである。
「・・・・・・・・・・俺は正真正銘男だ！なんなら脱いでもかまわん」
「いや！今ので十分わかったぜ」

そう言う魔理沙はさっき以上に赤くなり下を向いてしまう。
そんな魔理沙の頭に軽く手を乗っける。
「まぁ、とにかく朝食にしようや、昨日はなんだかんだで作れなかったから今日こそは俺が作ってやるよ」
そう言うと、竜一はそそくさと店の中へと姿を消した。

「へ～、美味いな」
味噌汁を飲みながら魔理沙は賛辞の声をあげる。
「これなら、いつでも嫁入りできるぜ」
そう言って笑う魔理沙に竜一は心底嫌そうに顔を歪める。
それもそのはず、そんなことを言われて喜ぶ男はあまりいないだろう。
「あまり嬉しくない提案だな、それは・・・」
「竜一の容姿なら女どころか男ですら捕まえられるぜ」
そう言われ、男に迫られるところを想像する。
『ＨＥＹ！彼女！今暇かい、よかったら俺と一緒に一夜の天国でも見に行かないか。ＨＡＨＡＨＡＨＡ！』
死にたい・・・
あまりの気持ち悪さに死にたくなってくる。
「・・・・・・・・キャベツの芯ほどの価値も無い。
それどころか害にしかなら無さそうだ・・・斬首確定だな」
「羨ましいぜ」
ニヤニヤと笑う魔理沙。
焼き魚を食べようと箸を伸ばす
が・・・
横から竜一の手が皿ごと奪っていく。
「あ、あああああああああ！」
むなしくも宙を掴む箸。

「少し調子に乗りすぎだ。
そんなニヤニヤしているやつに食わせる魚なんて無い」
「ま、待て！すまなかった、誤る。だから返してくれ」
突如、魚を盗られ慌てふためく。
流石の魔理沙も人質がいるのでは手も足も出ないようだ。
「残念だがこれはもう俺の魚だ！」
「なっ！・・・なら実力行使だ！」
魚を取り戻そうと箸を伸ばしてくる。
「取り返せるものなら取り返してみろ！」
負けずと箸を避ける。
ただ魚の取り合いをしているだけなのだが、そんな些細な事でも心底楽しいのだろう・・・
その表情は生き生きとしており、見てるこっちまで笑顔になる・・・
そんな魅力が秘められている。
「いい笑顔だな！魚返せ！」
そう言う、魔理沙もさっきまでの慌てるふためく様子とは打って変わり、こんな些細な出来事を楽しんでいる。
ただの食事・・・だが、そこには確かな楽しみがあった。
そのことに竜一は少しの懐かしさを感じていた。

「そういえば、昨日聞きそびれてたんだが・・・竜一がわざわざこんな所まで探しにくるものってなんだ？」
食後にお茶を飲みながら、急に魔理沙が訪ねてくる。
それは別に隠している事ではないのだが、あまり話したいと思えることでもない。
だが┃
「・・・・・・・・・・う～ん
・・・・・・・・・・まぁ・・・魔理沙にならいいか」

竜一は話すことにした。
今後、知っておいてもらった方が手がかりを集めやすいと判断したから・・・
なにより魔理沙のことはそれなりに信頼していたからだ。

「俺は自分自身に関する記憶ってのが抜け落ちてるんだ。
剣術も勉学も料理も知ってるし、思い出せる。だけど・・・それをいつ、どこで、誰に教えてもらったのかとかは思い出せないんだ」
「そうなのか・・・でも、じゃあ竜一って名前はどうしたんだ？
名前だけは覚えてたってベタなオチなのか？」
「これは、夢でそう呼ぶ人がいたからそのまま使ってるんだ。
だから、竜一ってのが本名かどうかは知らねぇが、この名前は気に入ってるからたとえ別に名前があっても変える気は無い。
ちなみに、俺が意識を取り戻した日・・・つまり、第二の誕生をした7月7日が俺の誕生日ってことにしてるぜ。
七夕が誕生日っていいだろ」
竜一はニカッっと口を吊り上げる。
そんな竜一に魔理沙は呆れる。
「ずいぶん適当なんだな、そんなんでいいのか？」
「性分なんだ、仕方ないだろ」
お茶を飲みながら、適当に答える。
そんな竜一の様子を見ていると一つの疑問が浮かび上がった。

「まだ出会って2日目だから勝手な思い込みだが・・・竜一ならそこまで過去のことなんて気にしないんじゃないか？」
普通なら自分が昔どんなやつだったかとか気になるものだろうが、竜一ならそんなことを気にせず今を楽しもうとする。
魔理沙は竜一のそんな所を気に入っていた。
だが、竜一は記憶を取り戻そうとしている。
そこになにがあるのか分からないが、それは危険を冒すことになっ

ても取り戻そうするのだろう。
それほど、竜一は過去に拘っているように魔理沙は感じた。
「ん？あぁ・・・俺もそう思うんだが・・・・・・どうしても思い出さないといけないことがある気がしてな」
そう言う、竜一の表情はどこか辛そうで、悲しそうで、苦しそうで、寂しそうで・・・
これ以上なにか聞き出すことが出来なかった。

しばらく沈黙が続いた。
そして沈黙を最初に破ったのは魔理沙だった。
「なぁ・・・竜一？」
「なんだ？」
「竜一は一応怪我してるわけだから家に置いていくつもりだったんだが・・・・・・」
一度一呼吸置き、続きを紡ぐ。
「昼から一緒に人里に行ってみないか？」
「人里？」
「あぁ、ちょうど金があったから欲かった物を買いに行こうと思ってたんだぜ。
だからそのついでに一緒に来て見ないか？記憶の手がかりが見つかるかもしれないぜ？」
竜一にとってそれはありがたい提案だった。
「そうだな、じゃあ俺は何をすればいいんだ？」
「刀を持って脅し文句を」
「いいからとっとと金だせって言ってんだろうが糞やろう！
・・・間違いなく捕まるな」
「ははは、まぁお前は何もしなくてもいいぜ、私に任せな。
人里くらい箒でひとっ飛びだぜ」
「落ちないことを祈っとく」
ニヤリと口端を吊り上げ冗談まじりに言う。

ギィ・・・ゴゴゴ・・・・

軋みを上げながら、ようやく動き始める中央に備えられた歯車
それに連動して動き出す小さな歯車達
物語は少しづつだが幕を上げ始めた。
それは、喜劇となるのか悲劇となるのか・・・
今はまだ誰も知る余地が無かった。

『ほぅ・・・ようやく動き始めるか・・・ならば直に・・・・・・・・
幻想郷は終わりをつげる』

そして、物語の幕開けと共に鼓動する一つの災いの気配・・・

続け！

夢の狭間編３　～動き始める歯車～（後書き）

ポニーテールって可愛いと思うんだよ。
そうは思わないか！同士諸君よ！

まぁそんなことはともかく・・・竜一の容姿について本編で触れてなかったのでここで書いたわけだが、女顔設定いらんだろ！って思うかもだが後でこの設定は使うつもりなんでどっかに書く必要があったのです（＝ω＝）
まぁ・・・今回ミスった感があって書き直そうかなって思ったのも事実なんですけどね・・・けどそこまで重要な場所じゃないしいっか♪ってねｗ

ようやくストーリーも動かしていけそうだし、これから頑張るよ！っていたいところだが・・・今からキサラギＧＯＬＤ☆ＳＴＡＲをプレイするから遅くなるかもだぜ！
・・・・・・・・・・楽しみにしてたんだ見逃してくれ（´・ω・、）

夢の狭間編４　～人里、さくらの出会い～（前書き）

ニャオー（≧ω≦）／
なんていうか・・・やっぱ前半ってことで色々な人に分かるように
って説明いれたりしてるからくどい感じになってるかも。
早く中盤を書きたいぜ（；'Ａ、）

人里にやって来た竜一と魔理沙
そこで待ち受けているものは・・・

～前回のあらすじ～
・剣の修行は始まったばかりだ！
・竜一は女顔？
・いざ行かん人里へ

夢の狭間編４　～人里、さくらの出会い～

幻想郷の中で最も多くの人間が住む場所。
それがここ、人間の里。

「へ～、思ってた以上に活気があるんだな・・・」
幻想郷と呼ばれる辺境の地だ。ましてや、辺りには妖怪という脅威が存在がしているのだ。
人里と呼ばれていても、もっと人の少ない静かな所だと思っていた。だが、現実はその予想を遥かに上回るほど活気づいている。それは、人間にとってこの里は本当に安全であるのだと証明しているようなものだろう。
かといって、妖怪がいないわけではないようだ。
妖怪を見かけ、気を張り巡らせたのはほんの一瞬、すぐに向こうに敵意の欠片も無いことを悟った。
「なぁ魔理沙、ここにも妖怪はいるみたいなんだが・・・なんで大丈夫なんだ？」
竜一は妖怪が人間を襲うということを知っていた。というよりも、身をもって味わった。
ゆえに、今ここの状態に疑問を持たずにはいられなかった。
「？・・・・・魔理沙？」
しかし、そんな疑問も後ろを振り返り、今置かれている状況を理解した竜一にとってはどうでもいいこととなってしまった。

さっき、まではすぐそこにいた。
すぐそこにいたはずだった・・・

だが、魔理沙は・・・竜一がほんの少し驚いている間に消えてしまった。否、竜一を置いてかってにどっかに行ってしまっているのだ。
「・・・・・・・・・・この状況どうしろと」
竜一の口から溜息が漏れる。
もちろん、幻想郷に来て間もない竜一には人里はおろか、幻想郷での知り合いは魔理沙ただ一人であり、他に誰もいない。

さらにいうなら、手持ちも無い。持ち合わせているものといったら・・・
「刀に、なんの価値もない財布、後は・・・・・・・・・ピコピコハンマー」
ここでは、刀は役に立たないだろうし、幻想郷で使える通過が入っているわけもない財布も同様、ピコハンなんて論外もいいところ。
ちなみにピコハンは魔理沙の家に落ちていた物だ。
普通の物に比べて一回り大きく、なぜか気になったので拾った。
そして、箒で飛んでいる時に隠していたこいつで驚かせるために使ったのだ。
結果は見事成功！
魔理沙は突然のことに驚き箒は激しく揺れ、笑っていた竜一は落ちた・・・
なんとか助けてもらえたものの激しく怒られたのは言うまでも無い。
「ま、今ではいい思い出ってやつだな」
なんてこと魔理沙が聞けばまた怒るだろうが・・・その魔理沙がいないのだ、問題ない。
「そんなことより・・・・・・さて、どうするか・・・」
ここ待っていれば、そのうち魔理沙は戻ってくるだろう。
しかし、すぐに戻ってくるという保障は無い。

「箒から落ちただけで戻りましょうなんてシャレになんねぇしな・・・

せめて、この里の構造ぐらい把握しねぇと」
そもそも竜一はここになにかあるなんて期待はしていなかった。
しかし、幻想郷で過ごすと決めた以上、人里のことを知っておくことは必要不可欠になる。そう判断したから付いて行くした。
そうなると、歩き回るしかないのだが・・・
「勝手に探索するか？・・・・・そうすっと、魔理沙と会えるかな～・・・・」
そう呟きながら髪を弄る。
竜一の懸念すれ点はそれだけだ。
土地勘も金も無いのも問題だが、まだなんとかなると思っている。
だが、魔理沙がいないと帰ることも出来ない。
「・・・・・うだうだ考えてもしかたないか」
先のことなんて分からない。
竜一は里を見て回ることに決めた。

「魔理沙は・・・いないか・・・」
1時間ほど歩いたところで里の大体の構造を理解することができ、元いた場所に戻ってきた。
やはり、最初感じた通りこの里は結構活気に満ち栄えている。そして、これも最初に感じた通り、ここでは人と妖怪の仲が意外と良好のようだ。
色々な店が物を売っており、人間の生活に必要な物は全て揃えることができそうだ。中には夜に妖怪専用店として営業している店もあるとのことなので驚きだ。
そんな風に色々見て回り、気になることが一つ―
　ヒソヒソ　ヒソヒソ

なぜだか、さっきから周りにいる人たちがこっちを見てはヒソヒソと話し込んでいる。
それは見世物になっているようであまり気持ちのいいものではなかった。
「・・・・・なんなんだ、いったい」
そう呟くも答えてくれる者はいない。
今は魔理沙が用意してくれた和服を着ている。
だから、服がおかしいということは無い。
他に変わった点があるとしたら刀の所持といったところだろうが、
今は袋に包んで手に持って歩いている。
だから、そこまで目立つということは無いはずなのだが・・・
「ハッ、イケメンすぎるってのも考えものだな」
結局そんな結論を出した。

そんな時に、路地から竜一の姿を窺う存在に気づいた。
初めは黒い塊に見えた。ところがその塊は、竜一に気づかれたと知ると、ゆっくりと動き始めた。家の屋根へと飛び乗ったかと思うと、ぶるるっと肩を震わせ、伸びろする。そして尻尾を丸めたり、また伸ばしたり。
猫だった。
竜一は猫が好きだった。それ以上に何か惹かれるものがあり、竜一は猫を見つめた。
全身黒色で、金色の瞳をしている。
猫は竜一の存在なんておかまいなしに毛の掃除をしていたが、そのうち隣の家へと屋根を飛び移ると竜一の方をジッと見つめてきた。
（ずいぶんと気ままな猫だな、まるでアイツみたいだ）
そう考える竜一の口元はどこか懐かしげに緩んでいる。
そして、気持ちが緩んだからだろう━
く～～～

竜一のお腹から空腹を訴える音が響く。
「むっ・・・そういえば昼食って無いんだっけ・・・」
魔理沙の家をで出たのが昼前で、人里で食べようという話になっていたのを思い出す。
人間空腹になると周囲の匂いなどに敏感になるものだ。
ちょうど目の前にオシャレな茶屋があり、そこからなにか美味しそうな匂いが漂ってくる。
竜一は自分の財布の中で諭吉さんが5人ほどこんにちはしてるのを思い出す。
だが・・・
「諭吉が居ても金は無い、どんだけ願っても金は無い・・・チッ、ある意味拷問じゃねぇか」
外なら観天喜地の喜びを与えてくれる諭吉さんも、ここではただの紙切れにすぎない。
諭吉さん御役目ご苦労様です。
く～～～～～
そんな竜一に追い討ちをかけるかのようにまた腹が鳴る。
今度のは結構大きい。
「腹減ったな・・・」
そんな竜一に一人の女性が話しかけてきた。
「お腹空いてるんですか？」
「あ、あぁ」
女性は見た感じ竜一と同い年くらいだろう。
椛の柄の付いた赤い和服。茶髪のロングヘアー。ぴょこんと一束だけ立っているアホ毛が特徴的だ。
手には買い物を袋をぶら下げている。
「でしたら、ぜひうちで食べていってくださいよ」
そう言って、彼女は竜一の手を取ると、ちょうど見ていた茶屋へと引っ張ていく。
「は？いやぁ、あの！・・・俺金が無いんだ」

「えっ？そうなんですか？」
「あぁ・・・」
く～～～～～
タイミング悪くも腹が鳴る。
それは勿論彼女にも聞こえただろう。お互いに気まずくなる。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・クス」
「む、笑うのは酷いな。
昼がまだなだけとはいえ空腹なんだ」
「すみません、うふふ。外の世界の方なんですよね？」
「ん？あぁ」
外来人というのはすぐに分かるものなのだろうか、話をしたこともない女性が竜一が外来人だとすぐさま言い当てた。
「さっき諭吉がどうとか言ってましたけど、外の通貨は持ってるってことでしょ？」
「まぁ、あるにはあるが・・・ここじゃ、意味無いだろ・・・」
「いえ、それが最近は外来人の方が増えているので外貨も扱っているんですよ」
その言葉に竜一は驚きが隠せなかった。
外来人の存在が増えているということ。そしてなにより、外貨が使えるということに。昼食にありつけるということに。
「本当なのか・・・？」
「はい。
もう一度訊ねますね、うちで・・・さくら茶屋で食べていきませんか？」
そう言って浮かべる彼女の笑みに、竜一はこの人里に来て初めて人の温もりというものを感じた。

「女将さん～お客さん～」
「ん？・・・いらっしゃい！さくらちゃんは荷物置いたらそのまま接客頼むよ～！」
「は～い。
ちょっと待っててね」
そう言うと、彼女は奥へと行くと、荷物を置いて戻ってくる。
「どうぞ、こちらです」
連れて行かれたのはちょうど外がよく見える席だった。
本来ならまっさきに取られるポジションだろう。だが、周りを見渡しても他の客はいなかった。
「他の客はいないんだな・・・」
そんな竜一の呟きに、彼女は軽く微笑むとそっと答える。
「本当は今の時間は昼から夜への準備時間なんですよ」
「え？じゃあ、俺が迷惑になってちゃいけないんじゃねぇか」
竜一は迷惑を掛けまいと出口へと戻ろうと席を立つ。
だが、彼女は帰ろうとする竜一の手を掴むと、それは違うとでも言うように静かに首を横に振り、言葉を紡ぐ。
「あなたが迷惑になるなんて思ってません。
どうせ準備は大方できてるんですし・・・それに、私も女将さんも空腹の人を放っておけるような人間じゃないんです。
それに、あなたを連れてきたのは私のわがままです」
彼女の言葉に竜一はただただ固まってしまう。
本当についさっき会ったばかりだ。名前すらまだ分からない程度なのだ。
なのに、彼女はそんな人物のためにわざわざ暇を割こうとしているのだ。
「・・・・・・変なやつだな、あんたは」
そんな彼女を見ていたら自然とそんな言葉が出てきた。

「・・・・・・・あんた名前は？俺は竜一、天草　竜一だ」
「へ？・・・・あ、そういえばまだ名乗ってませんでしたね。私は春樹（るき）　さくらです」
「さくらか、この店と同じ名前なんだな。
せっかくだし、ここで食べさせてもらうぜ。ありがとな。」
静かに微笑む竜一を見て、さくらも笑顔になる。
そして明るい声で言った。
「毎度、ありがとうございます！」

～青年食事中～

「ふぅ、美味かった。ご馳走様」
「お粗末様です」
竜一が頼んださくら蕎麦と団子を食べ終わると、さくらが食後のお茶を差し出してくる。
「ありがと」
そう、お礼を言うとさくらは「いえいえ」と笑う。
なんだかんだで食事中はさくらが傍にいてくれ、色々と話をしたので楽しいものとなった。
「けど、ほんと美味かったから。」
「ふふ、女将さんが聞いたら喜びますよ」
と、そこで竜一はさきほど里を回っていた時のことを、そして里に

いる妖怪のことを思い出す。
「そういえば、聞きたいことがいくつかあるんだが、いいか？」
そう尋ねると、一瞬キョトンとするがすぐにさきほどまでの笑顔に戻る。
「なんですか？分かることでしたら教えしますよ」
「ありがと。じゃあ、スリーサイズを」
「えっと、上から・・・・・って、女性にいきなりなにを聞いてるんですか！」
持っているお盆で頭を叩かれた。
・・・どうやら怒らしたらしい。
「いや、これは男に聞いてもつまんねぇだろ？」
「そうですけど・・・だからって聞いていいことと悪いことがあります！」
それはごもっともだと思う。
「ハハ、冗談はともかくとして、ちゃんと聞きたいことはあるので」
「もう・・・次、変なことを聞いたら本気で怒りますからね」
（さっきのも十分痛かったけどな・・・これより痛いとなると怒らせるのはよくないか・・・）
そんなことを思っていると、さくらが「今、失礼なこと考えませんでしたか？」と尋ねてくる。
別に竜一は顔に出やすいということは無い。それどころか竜一は本気を出した時のポーカーフェイスは誰であろうと見破れないと自負している。
だが、どうにも考えが読まれる。どうにも幻想郷の人物たちは感が鋭いらしい。

「で、質問だが・・・この里の人達・・・・・やたらと俺を見てくるんだが？」
そう竜一が尋ねると、さくらは当然のことと言わんばかりに答える。
「この里では人との繋がりが大切なんです。

だから、あなたのように外から来た方はすぐわかりますし、それだけ美しい容姿をした人がこの里に来てるとなるとすぐ噂にもなります。
それに、うふふ、そんな物を差して歩いていたら嫌でも目立ちますよ」
クスクスと笑いながら、帯に差したいるピコハンを指さす。
そこで、ようやく竜一は自分の帯にピコハンを差していたことを思い出す。
たしかに竜一ほどの年齢が帯に差して持ち歩くのはどうみても不自然な物であり、目立つのもしかたないだろう。
「そういうことだったのかよ・・・」
「けど、そんな気にしなくても大丈夫ですよ。
竜一さんは全然マシな方ですし、外来人が最近増えているのは知ってますか？」
さくらは首を傾げるながら尋ねる。それに竜一は「そうなのか？」とだけ返した。
「はい、どうにも最近、多くの外来人が幻想入りするという異変が起こってるみたいなんです。
その中には体中に包帯を巻いた人や、マスクにサングラスの不審者って感じの格好をした人もいるぐらいですしね。後はハゲの人が多いです」
「なんというか・・・それは変体ばかりが幻想入りしていないか？」
大丈夫なのだろうか・・・この幻想郷は・・・
心の底からそう思ってしまう。
「でもでも、いい人達ばかりですよ」
弁明のつもりで付け足した言葉。だが、姿を聞かされただけで、実際あったわけでもないので変態としてのイメージがなかなか消えなかった。
「ま、そっちはわかった。

じゃあ、もう一つの方だ。この里には妖怪がいるみたいだがなぜ大丈夫なんだ？」
「それはですね、――」

～女性説明中～

幻想郷の人間が滅ぶと妖怪も困ることから、妖怪の賢者によって保護されている。
平和な現在の幻想郷においても形骸化しつつも残されている「妖怪は人間を襲い、人間は妖怪を退治する」という幻想郷のルールの例外的な場所。
そのため妖怪が暴れるとしたら妖怪の個人的な感情による私情であるため、めったに無い。
また、妖怪退治が出来る力を持った人間もここで暮らしてるため、安全に暮らせる場所になっている。
とのことらしい。

茶を飲み終えると、竜一は傍に置いていた刀を手にそっと立ち上がり言った。
「それじゃ、そろそろ行くわ。
ツレ探さないといけねぇし」
もちろん勝手にいなくなったあの魔法使いのことだ。
「お連れさんがいたんですか？
わかりました、それじゃあレジの方に来てください」
お互いにレジへと足を運ぶ。
「１２５０円です」

「ん、１２５０円だな」
金を払おうと財布を開き・・・・・
「ん？」
自分の目がおかしくなったのかと目を擦り、また財布の中を見る。
「・・・・・・・・・・・・・・・・」
どうやら目は正常だったと認識する、そんな呆然としている竜一を心配するかのようにさくらが声をかける。
「竜一さん？」
「・・・・・・・・・金・・・・・ないわ・・・・・・」
「え？」
「・・・・・・・・金がない」
竜一は小さな声でそうとだけ呟いた。
「けど、たしか・・・１万円はあるって？」
「あぁ・・・あったはずなんだが・・・ない・・・」
たしかに諭吉さんが５人いた、いたはずなんだが・・・５人みんなで一斉に家出した。
生憎、野口さんは最初から一人も持っておらず、今財布の中にあるのは１６３円となっている。
（魔理沙といい諭吉といいどうしてこうも・・・・・・あっ・・・・）
諭吉失踪事件そこに一つだけ思い当たることがあった。
『ちょうど金があったから欲かった物を買いに行こうと思ってたんだぜ』
『ちょうど金があったから』
人里に行こうと魔理沙が誘った時に言っていたこと。あの時はなんの違和感もなく、ただ金があるから買い物行こうと言っているものだと思った。
だが・・・これは、金があったから＝金が手に入ったからって意味だったんじゃないか？そして、その金とは竜一財布の中身だったんじゃないか？そう思えてきた。
（・・・・・やられた、あの泥棒め！）

どちらにしろ、今金が無いことには変わりないが・・・これが本当だとしたら後に大分変わることとなる。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
諭吉の行方を推理していると、突如さくらが言う。
「・・・・・じゃあ、こうしましょう！」
さくらは名案を思いついたと胸の前で手を叩く。
「今回は、初回サービスってことで私が奢ってあげます」
「・・・・・・・・・・ハァ？」
（今なんて？初回サービス？奢る！？ついさっき出会ったばかりの俺に！？どんだけお人好しなんだよ・・・）
竜一は苦笑いを浮かべる。
「・・・・・・・・せめてツケに」
「別にそれでもいいけど、余裕のあるときにしなさいね」
「できれば、すぐにでも払いたいんだがな・・・仕方ないか・・・」
「それじゃ、そういうことで。毎度あり、また来てね」

竜一は店を出ようして・・・足を止めた。さくらへと振り返ると自分の想いをそのまま言葉にする。
「なぁ、やっぱりこんなに世話になってるのになにもしないで帰るなんてできねぇ。
せめてなにか手伝うことはないか？」
竜一がそう言うと、さくらが何を言い出すんですかとでも言いたげに驚く。
「けど、お連れさんを探さないといけないんじゃないんですか！？」
「なぁに、どうせこの辺にくると思うんだ。ここにいたら気づくさ。」
「ですが・・・」
さくらが口篭るっていると店の奥から女将が出てきて、声をかける。
「いいじゃないか、手伝いたいって言ってくれるんだから。手伝わ

せてやりなよ」
「女将さん！」
女将は驚きの声を上げるさくらの頭を軽く撫でると竜一の方へと向き直る。
「いつもはこの子が行くんだけど、配達物があるんだ。
私たちは店の準備をするからそれを運んできてくれないかい？」
「わかりました、他にも手伝うことがあればしますけど？」
「いいのよ、店のことは任せなさい。
あっ、そうねぇ・・・よかったらまた食べに来てちょうだいな。もちろん今度は御代を持ってね」
そう言うと、女将は豪快に笑いだす。
「ほらほら、あんたもそんな拗ねたような顔をせずに奥に行って配達物の準備とこの子のために地図を書いておやり」
「・・・は～い」
返事を返すと、さくらは店の奥へと消える。
「あの子はね、いつもああやって優しい笑顔で振舞ってるから人気があるのよ。
だけどね、そのぶんどこか無理をしてるのよ、もちろん顔には出さないけどね。
けど・・・あんたと話してるあの子は心のそこから笑ってた。ほんの少し前に会ったばかりだっていうのにねぇ。」
「そうなのか？彼女が無理ねぇ・・・確かに彼女ならそうなのかもしれねぇな。
・・・・・とっ、一つ訂正な俺はそんな凄いやつじゃねぇよ」
「あはははははは、そうかいそうかい、知らぬは本人ばかりか～、あはははははは。
けどね、あんたには確かに人を惹きつける才能があるんだろうさ」
女将は竜一の頭をくしゃくしゃと撫でると店の奥へ行ってしまう。
「・・・・・・・人を惹きつける才能・・・ねぇ・・・」
一人残った竜一は静かに呟くと、くしゃくしゃにされた髪を直しな

がら女将の後を追って店の奥へと付いていった。

夢の狭間編４　～人里、さくらの出会い～（後書き）

本当は次のやつとセットで更新しようかと思ってたんだけど・・・
長くなるし、更新遅くなりそうだったから投稿！イェ――、（　。Д。）人（。Д。）ノ――ィ
オリキャラ二人登場ですね～ｗ
二人ともいい人なんですよ、きっと！
というか、本当は金が無い→体で返してもらうぜ～って流れでオチをつけるつもりだったのにいい人に書きすぎて無理になった＼（^o^）／オワタ
後悔はしてないけどねｗ
ところで、幻想郷の飲食店って茶屋でいいのかな？
ってか今回東方要素殆ど無くね？ｆｍ・・・いつの間にかオリジナルストーリーになっていたようだｗｗｗ
あと、眠い中書いたから誤字脱字を見落としてるかも・・・一応後でまた見直すけど、あったら指摘してくれるとありがたいです。

それにしても・・・キサラギＧＯＬＤやテイルズウィーバーもやっていきたいし、勉強もせにゃならんし・・・
意外と大変だぜ！
そういえばＴＷは新キャラにイサックがようやく登場しました～！
イェ――、（　。Д。）人（。Д。）ノ――ィ
イサックは火力は低いみたいだけど・・・
範囲攻撃は異常や！あの範囲の広さに嫉妬するぜ・・・
けど、イサックに浮気はしないぜ！
俺のメインはナヤだけだもん！マキシとランジに浮気なんてそんなの気のせいに決まってるさ～！

キサラギの方は・・・どのキャラも・・・・・・
☆○o。・・・・＊メッチャンコゞ（＊′∀、＊）ノカワィィ＊・・・・
。o○☆
ストーリーの方はまだ評価できないけどキャラは満点あげてもいいよ〜！
俺は命が一番好きだw

バイニャー（≧ω≦）ノシ

夢の狭間編５　～配達×観察×２つの出会い～（前書き）

ニャオー（≧ω≦）／
ギリギリ１ヶ月放置は回避した！と思う（，・ω・、）
ちくしょ～～～ギリギリ間に合わなかったぜ～～～orz

（「、・？・）「｛今まで何してたか？

いや～受験の準備とか、テストとか、体調不良とか色々忙しかったのですよ？
まぁ！一番の理由は某実況主の動画を一気に見てたり、ハンターハンターのアニメを１から見直してたりなんてことは無かった！！！
キルアいいよねキルア！
そして・・・後にゴンはゴンさんになると考えると・・・ね・・・。
どうしてああなったんだろうね（，；ω；）ウッ…

・・・・いや、本当に（；，・ω・、）ゞごめんなさい
あ、タイトルは見て分かる通りＨ×Ｈですねｗ

宅配を頼まれた竜一、その配達先とは―
そして、その途中・・・２つの出会いが竜一を待ち受ける。

～前回のあらすじ～
・魔理沙失踪
・さくらとの出会い
・配達ミッションスタート

夢の狭間編５　～配達×観察×２つの出会い～

「いや～いい買い物したぜ～」
魔理沙はその手に買い物袋をぶら下げ、嬉々とした様子で里の中を歩いていた。
そして、その買い物袋に入っている物は竜一の読み通り、竜一の財布からちょこっと借りた諭吉さんで買った物だ。

「それにしても・・・付いて来てると思ったんだがな・・・竜一のやつどこにいったんだ？」
魔理沙は魔理沙で竜一を探しているのだが、いまだに見つけてられないでいた。
そこで、とにかく一度最初に降りた場所に戻ることに決め、そこへ向かって歩いている。
「ん～・・・ただぶらついてて見つかるかな～。
あいつがずっと待っていればいいんだが・・・それは無いよな～・・・」
そう呟くと、魔理沙はため息をつく。

辺鄙な場所にある里とはいえこの里はそれなりに広さがある。
待ち合わせ場所でも決めているのならともかく、お互いがむしゃらに探し回るだけではなかなか出会えるものじゃ無いだろう。
そこで、どうしようかと頭を悩ませていた魔理沙は、ふとあることを思い出す。

「そういえば、あそこには茶屋があったはずだよな・・・そこで見

てないか聞いてみればいいか？」
魔理沙は足を速める。だが、それは竜一を探すためではない。
「待ってろよ～団子～」
それは、茶屋で売られている団子を食べたいがためであった。

その頃、竜一は頼まれた宅配物を届けるために里の外れあたりまで来ていた。
「・・・この辺りだと思うんだが」
辺りをキョロキョロと見渡し、地図と見比べる。この辺りであることは間違いないのだが、なかなか辿り着けないでいた。

手にしている荷物が重く感じる。もし、このまま辿り着けずに戻らなくてはいけない状況になったら。それは、さくらや女将の迷惑になる。たしかに、このまま戻ったとしても二人とも「人里には来たばかりだから仕方ないね」と笑って許してくれるだろう。だが、その瞬間に竜一は信頼して任かしてくれた二人を裏切ることになる。なにより、一度請けた仕事を投げ出すのは竜一のプライドが許せなかった。
「・・・意地でも届けねぇとな」
そう呟くと、これからどうするかと考えに耽けようとした。

そんな時、一人の少年が目に留まった。
少年は木へと背中を預け、片手に持った本は閉じられ、竜一の方をジッと見ていた。
薄い褐色の短い髪を風になびかせ、空のように澄んだ目は鋭く細められ、冷たく、まるで竜一という存在全てを見透かそうとしているのかのように感じられる。そして、それ以上に拒絶の念、敵意が感じられる。
だが、
その程度のことで動じる竜一ではなかった。

竜一はその少年を一瞥するとニヤリと口端を吊り上げと、ゆっくりとした足取りで少年へと近づいていく。その姿はまるで悪魔のようなものを感じさせ誰もが関わりたくないと思えるものだろう。
竜一は少年の前まで来ると、
「おいガキ、聞きたいことがある」
と尋ねる。

あくまで、上から目線の偉そうな物言いに少年は驚きと呆れで顔を歪ませる。
「それが人に物を尋ねる態度・・・」
だが、しかし、それを遮って竜一は再び少年に問いかける。
「いいから、聞きたいことがある」
「・・・・はぁ、こっちは歓迎してないっていうのに。何が聞きたいって言うんですか？」
溜め息をつくと、諦めたかのように立ち上がり、竜一の目を見据えた。
近づくと、その瞳は冷たさ、竜一の動作一つからも情報を得ろうと

しているのがより一層強く感じられた。
それは、この男がどのような人物なのか？
それは、この男の目的はなんなのか？
それは、この男何者なのか？
それらの意味合いが篭った視線。

少なくとも、普通の少年からは考えられないことだ。それどころか大人ですらこのような視線をすることは少ない。いや、ここまで徹底した敵意を持つことは普通に生きていればないだろう。それだけ、この少年が他者への警戒が徹底しているというのだ。
ゆえに竜一は笑った。
「道を尋ねたい、ここにはどうやっていけばいい？」
その少年の生き方の賢さに、偶然見つけた稀有な才能の持ち主に。
「・・・・・・何故ここに？」

地図を見て、竜一の目的地を知り、少年の目がより鋭くなる。
「・・・それは誰とも知れないガキに教えなきゃいけないことなのか？」
「そこは、ぼくの先生の家です。変な理由で訪ねるのなら見逃すわけにはいかない。まして、教えるわけがない」
「そうだったのか？そいつはとんだ偶然だ。ハハハハハ」
竜一はわざとらしく驚いた顔をして声を上げて笑うと、左手に持つ包みを見せびらかすように前に出す。
「ま、安心しな。俺はこいつを届けるように頼まれただけだ」
すると、少年はその包みに注意深く観察する。
「・・・・・・・・・」
「そう警戒するな。変な物は入ってない」
「・・・・・・みたいだですね。中は団子ですか？」
「分かるのか？」
「はい。その包みを使用しているのはさくら茶屋と・・・後は誰か

個人で使用するくらいですから。慧音先生の家に持っていくとなると茶屋の人の可能性が高い。ただ・・・あなたが盗んだのでなければの話だけれど」
少年は最後にそう付け足すと、にっこりと笑った。だが、その瞳に宿る敵意はまだ残っている。

「クックク、そう見えるか？」
「・・・・・いいえ。あなたはそんな人ではありません。というより、そもそもあなたが盗みを行う意味がありませんから」
「へ～、今出会ったばかりだというのにどれだけ分かるんだ？」
そう問いかける竜一は、次に紡がれる言葉に意識を集中させる。少年がどう答えるのか、どれだけ見えているのか気になったから。
「さて、あなたは読みづらい。
それより、慧音先生の所へ行きたいのでしょう？近くですし、連れて行きますよ」

そう言うと、少年から感じる敵意が消える。
「なんだ、信じてもらえたってことか？」
「いいえ。ただ、連れて行く程度には問題ないと判断しただけです」
言い終わると少年はさっさと歩き始めたので、竜一も後を追うように歩き始めた。

しばらく会話も無く歩いていると少年の方から話かけてきた。
「なんでそんなことをしてるんですか？」
「ん？あぁ・・・金が無かったからだ」
少年の問いかけに竜一は簡単にただ一言で答える。

「あなたならもっと効率よく稼ぐ方法があるはずですが？」
少年は竜一の右手に持つもう一つの包みに視線を向ける。それは、目立たないようにと刀を収めている包みだ。
「あいにくここには来たばかりでな、依頼人がいない」
「この人里では実力さえあればすぐに名なんて知れ渡りますよ。そして、あなたはそれに見合う実力があると思います」
「・・・・その根拠は？」
「ぼくは専門的なことが分かるわけではありません・・・ですが、素人目から見ても里の人間よりあなたの方が強いことは分かります。ふざけてるように振舞っていながらも一つ一つの動作にちゃんと意味がある。なにより、安全な人里の中でさえ隙の一つも見せようとしない。他の人だとそこまでのことはできない。そうですね・・・あなたの動きは一度見たことのある、達人と呼ばれる人のものに近いと考えました」
「へ～そうなのか？もし本当に俺が強いとしたらお前の観察眼は侮れないということになるな」
「お互い様です。あなたは頭も切れるみたいですから」
お互いに声は上げずににっこりと笑う。それは、本心からの笑いではなく、駆け引きの途中であるかのような虚偽の笑い。

「ま、どちらにしても今すぐ金が必要だから意味が無いな」
そう言うと、竜一は大げさに両手を挙げ、お手上げだと言う風に首を振る。
「そうですか」
「俺からも一ついいか？」
「なんですか？」
「俺についてどこまで分かった？」
「・・・・・・・・・・」
「ま、答えたくないのなら別にいいんだけどな」
竜一が話は終わったとばかりに少年の顔から目を離すと、少年が静

かに淡々と話しだす。
「・・・・・普段の素行や言動に問題があるということ、ワザとそのように振舞っているということ。実は計算高く慎重な性格であるということ、あなたは幻想郷に来て間もないということ、そして・・・幻想郷には何か目的があって来たということ」
「・・・・・・・・とんだガキだな」
溜め息混じりに呟く。
普段の素行に問題があることは見れば分かるが、そこに隠された意味に気づかれるとは思ってなかった。つまりこの子供は竜一の予想を超えた観察眼を持っていたというわけだ。
この短い時間の間にここまで正確に読まれているとは思っていなかった。そして、その驚愕する観察眼を１４歳程度の少年が持ち合わせていることに驚いた。
「・・・お前とこれ以上共に行動してたら俺のこと全てを知られそうだ」
「まさか、あなたほど隠すのが上手な人は始めてだ。上辺までしか見抜けそうにない」
「誰かに読ませるもんじゃねぇぜ。俺の心はな」
「ハハハ、みたいですね」
「・・・・・・・・・・」

竜一は考え込むかのように黙り込む。言おうか言わまいか。今出会ったばかりのちょっと変わった少年にわざわざ言うだけの価値があるのか。言ったところで意味があるのか。
だが、竜一は今までのふざけた感じとは打って変わり、静かに、それでいてどこか優しさの篭った声色で言った。
「なら人生の先輩から一つだけ忠告だ。人を疑うのはいい、全てを敵だと思うのも構わない。だが・・・お前は少しだけでいいから味方を作るべきだ。いずれ闇に堕ちるぜ」
「・・・・・・・・あいにく疑うのは性分なのですが・・・ふふ、肝

に銘じておきます」

竜一は、「そういえば」と呟くと、ハッと思い出したかのように少年にもう一つ尋ねる。
「ところで、俺はお前の何の役に立つんだ？面倒は御免だぞ」
少年は驚きで目を見開く。しかし、すぐに何事もなかったかのように無表情に戻る。だが、今の一瞬で竜一には十分確信できた。この少年が今竜一に関わっているのはいずれ少年にとってなにかしらの利益になると判断したからだと。
「どうしてそう思うのですか？」
「なに、ただの勘だ。でも、俺の勘は当たるぜ？」
少年は考え込むように黙る。この時少年がなにを考えてるかは竜一には想像できなかった。それは少年自身にしか分からないこと。いや、少年にもよくは分かっていないのかもしれない。

「あなたはとんでもない人のようだ。・・・・・・それでも他の人よりマシなのでしょうが」
「あ？なんか言ったか？」
とんでもない人と言ったところまでは聞こえたが、最後になんて呟いていたのかは竜一には聞こえなかった。
「いえ、なんでもありませんよ。
それより、見えましたよ。あれが慧音先生の家です」

少年の白く長い指が一軒の家を指差す。
それはどこにでもある家。なんの変哲も無い家だった。ただ少し違うとしたらそこは人里の端にある。家の後ろ手には森が広がっていて、少し奥に進めばそこはすでに安全が約束されない危険な地帯であるということだ。

「ん、道も覚えたしもう大丈夫だ。ありがとな」
竜一がお礼の言葉を言うと、少年は心底意外とばかりに驚きの表情を表す。
「・・・・・少し誤解してました。あなたから礼の言葉を聞くとは思ってませんでした」
その言葉を聞くと今度は竜一の方が呆れに顔を歪める。そして、肩を竦めると溜め息を吐く。
「おいおい、失礼なやつだな。俺でも礼くらい弁えている。これでも必要なら敬語も使ったりするんだぜ。」
「それは失礼しました。
そうだ、名前を伺ってもいいですか？」

突然のことに竜一は虚をつかれたような顔をするが少し考えると短く答える。
「天草竜一だ」
「天草さんですね。ぼくは神凪流（かんなぎながれ）」
「・・・神凪？」
そう呟く竜一の表情は今までのように上辺だけのものとは違い、どこか不安の混じったものとなる。もちろん流がそのことを見逃すことは無かった。
「神凪がどうかしたんですか？」
「いや・・・なんでもない」

神凪とは古くから神の依り代とされている人物を表す。それはつまり、神と通じるということ。そして、神の贄となるということ。
しかし、現代ではそのようなことが行なわれるわけはない。いや・・・ここ幻想郷にはいまだに残っているのかもしれない。
だが、神凪という名が、その名の意味することがなぜか竜一の心を襲った。だが、その不安がなんなのかは
今の竜一には分からなかった。

「それと、一つ誤解してるようですがぼくも付いて行きます。問題ないですよね？」
「は？問題は無いが・・・まだ信用ならないってのか？」
「いえ、ただ・・・あなたのことに興味がある。だから、しばらく付き合わせてもらいたい」
「・・・・・・男に好かれても嬉しくないな。まぁ勝手にしろ」
「そうさせてもらいます」
にっこりと人形のような微笑を浮かべると、竜一の後へと付いていった。この時、流は一つのことを確信していた。この人・・・天草さんは・・・心の奥底に深く冷たい世界に抱えている。それは自身の抱える世界よりも遥かに冷たい闇の世界。そしてそれ程までの深き闇を抱えている人物を流は一人だけ知っていた。
だが・・・竜一とその人物は違う。竜一には闇の中に確かな光が感じられた。ゆえに彼から感じるささやかな光が気になった。だからこそ強く惹かれた。

流が玄関をノックする。
「慧音先生」
流が家の中へと呼びかける。すると、その呼びかけに一つの声が応えた。

「・・・・・その声は流か？少し待っていろ」
若い女の声。
家の中からバタバタと音が聞こえてくる。その音を聞きながら竜一は「ふむ」とうなずくと流の後ろに立った。
その直後に扉が開かれ、一人の女性が出てきた。
「悪い待たせたな」

まず目に付くのが、女性の被っている妙な帽子だろう。
竜一の髪とよく似た青みがかった白い髪、それに似合うような整った顔立ちは知的な感じを醸し出している。
青色メインとした服、胸元には赤いリボンが付いている。
キリッとした雰囲気はどこか堅苦しさを感じさせるも、悪い気はしないのは彼女自身がそのような人物なのだからだろう。

「流？その方は？」
慧音の視線に竜一が留まる。
「この人は・・・」
だが、流が言い終わる前に竜一は流の首に腕をまわし、静かに言った。
「喉が渇いた、とりあえず入れてくれ」

「まったく、驚きだぞ。初対面の人にいきなり入れてくれなんて言われるとは」
そう呆れ気味に慧音が言う。
結局、流が簡単に説明をすることで家の中へと入れてもらうことができた。

その流はというと、家の中へと入るとすぐさま近くの本棚まで行くとその中から厚い本を一冊取り出しその場で立ち詠みしている。
「思ったことをすぐに言うのが俺の流儀なんだ。変えるつもりはない」
「変わった人なのだな。あまりいないぞ、そういう人は」
「だろうな」
そう言って、竜一はニヤリと笑う。

「ほら、茶だ。」
竜一の前に一杯の茶と、持ってきた団子が置かれる。
「これ俺が持ってきたやつだろ？今食っていいのか？」
「かまわぬよ、必要な分は残っているからな。
それより、お互い自己紹介がまだだろう？私の名前は上白沢慧音（かみしらさわ けいね）。
ここで歴史の編纂をしたり、すぐ傍の寺小屋で子供たちに勉学を教えている。お前と共にいた流も私の生徒だ」
礼儀正しくそう言う慧音はどこか誇らしげである。実際にそのことを誇りに思っているのかもしれない。

「俺は天草竜一。最近ここに来た。外来人とかいうやつらしい」
慧音とは対照的に肩をすくめながら、簡潔に答えた。
だが・・・
その紹介に慧音は驚きの表情に変わる。
「・・・・・・天草・・・竜一？」
「あ？どうかしたのか？」
「・・・いや、友人と名前が同じでな。すまない、気にしないでくれ」
「・・・・・・そうか・・・・・・すまない」
そう言って、竜一は軽く頭を下げた。

「なぜ竜一殿が謝る必要がある？」

「・・・辛そうな顔をしたようにみえたからな、聞かなかった方がよかったんじゃないのかと思ってな」
その言葉に慧音は少しだけ驚くと、クスっと小さく笑った。
「竜一殿は人の気持ちに聡いのだな。それに優しいお人のようだ」
「あいにく、俺はそんないい人間じゃないぜ？」

その言葉を聞くと慧音は再び小さく笑うと静かに語りだした。
「友人もそんなやつだったんだ」
「あ？」
「友人も竜一殿のように人の気持ちに聡くてな、困ってる人がいたら、なんの一切の興味も無さそうに振舞うくせに陰でなんとかしようと動いて・・・優しいやつだったんだ。
だけど・・・３００年前のあの異変で・・・・・・・イタッ」
だが、竜一は慧音の話の途中で慧音の頭を軽く小突くいて話を止めさせた。
「だから、辛いなら話すなって言ってんだよ。そんな話を聞きながら食べても美味くなくなだろう」
「・・・すまない。こんな暗い話をしてしまって」
「分かったんならいい、気にするな。
だが、悪いが一つだけ聞かせてくれ。そいつと俺は似ているのか？」
「そうだな・・・そうかもしれん。見た目も性格も違うが・・・竜一殿はどこか似ている気がする。・・・懐かしかったのだろうな」
そう言うと、静かに笑う。その笑みはやはりどこか寂しげに見えて・・・聞くべきじゃなかったんじゃないかと後悔させられる。

そんな暗くなってしまった雰囲気を一人の少年が変える。
「先生、この本を借りてもよろしいでしょうか」

流はこっちへと歩いてくると、大切に持った一冊の本を慧音の前に差し出す。
「あぁ、構わんよ」
「ありがとうございます」
流は礼儀正しく礼を言うと、再び本棚の前へと戻っていく。そして、また別の分厚い本を取り出すとその本へと集中する。

「そういえば竜一殿は流といつ頃出会ったんだ？あいつが他人と関わることなんて滅多にないのだが」
「ついさっきだ」
「そうなのか？よくあいつと一緒にいれたものだな。あいつは他人とは関わろうとしない」
「だろうな。だが、慧音も・・・・・・・・」
突如、竜一は考え込むように黙ると慧音の顔をジッと見つめる。そんな竜一の態度に慧音は少しだけ頬が赤く染まり、居心地の悪そうに体を動かせる。
「あの・・・竜一殿？どうかしたのか？」
「・・・俺はあんたのこと慧音さんとでも呼んだ方がいいのか？」
そう真面目に問いかけてくる竜一に慧音はポカンとすると、可笑しそうに笑い出す。
「・・・・・ふふふ、好きにしてくれてかまわぬよ」
「そうか、そいつは助かる。
で、慧音もあいつとは普通に関わってるみたいだが？」

「私の場合時間を掛けて徐々にだったがな。あいつが心を許してる人物は私とさくら茶屋の二人ぐらいなものだ。出会ったばかりの人物に懐くことなんて初めてなんだぞ？」
「そうなのか？ってか、あのガキ・・・さくら茶屋のやつらと知り合いだったのか、通りで包みを見ただけで分かるわけだ」
「・・・知らなかったのか？まぁ、流はあまり自分について語ろう

としないから仕方なかろう」
「だろうな・・・・・・いや、待て。そもそもあいつはあれで懐いてるといえるのか？」
竜一はここに来るまでの流の態度を思い返してみる。
少しだけ話はしたものの、常に警戒されていたように感じる。そんな態度で懐かれていると言われても全く
そうは思えないものだ。
だが、慧音はそれを肯定する。
それは流と接してきたこそ分かるものなのだろう。流は竜一の傍にいることを望んでいる。慧音にはそう思えていた。

「あぁ、あいつは間違いなく竜一殿のことを慕っている。流がここまで連れて来たのがいい証拠だ。普通ならありえないことだからな。竜一殿には何か惹きつけられるものがあるのだろう」
「惹きつけられるもの・・・ねぇ・・・。男に好かれても嬉しくないな」
その言葉に、また慧音は可笑しそうに笑う。
「ふふふ、そう言わないでくれ。あいつはあいつで色々抱えているんだ。できるなら仲良くしてやって欲しい」
「・・・・・ま、考えとくよ」
「あぁ、頼むよ。あいつは・・・「竜一さん、そろそろ帰らないと時間が」ん？もうそんな時間か」
気が付くと流が傍に立っていて、窓からは夕日が差し込んでいた。

「そうか、それじゃ帰らないとな。仕事の途中だということを忘れてた」
竜一は傍に置いてあった刀の入った包みを手にすると立ち上がる。
「すまない、話に付き合わせてしまって」
「気にするな。俺は綺麗な女性と話せて楽しかったぜ」
顔を暗くする慧音に竜一は笑いかけながら声をかける。

明るく、優しい声で。
「ふふふ、そうか。それはよかった。だが、誰にでもそういうことを言うのは関心しないな」
「おいおい、それじゃ俺が誰にでもちょっかいを出す色男みたいじゃないか」
竜一のその言葉に流が応える。
「竜一さんなら彼女の前でも別の女性に声をかけそうですね」
「さぁて、どうだかね～。」
「あまりに酷いようなら私が教育し直してやろう」
そんな慧音の申し入れに、竜一は顔をしかめるとお断りだと言わんばかりに手をヒラヒラとさせる。
「魅力的な提案だが、遠慮しておくとしよう」
そう言うと、慧音の表情をチラッと盗み見る。
さっきまでとは違い、慧音の表情は明るくなっている。そして、竜一には明るくなった慧音の表情の方が断然魅力的に感じられた。

慧音は二人を見送るために玄関へと移動していた。
「長居して悪かったな。お茶おいしかった」
「あぁ、こっちこそ悪かったな、変な話をしてしまって」
そう言うと、さっき話していたことを思い出してしまう。どう考えても初対面の相手に話すような内容ではなかった。そして彼に気をつかわせてしまった。
（・・・竜一殿に悪いことをしてしまったな）
その考えが顔に出ていたのか、竜一が声をかける。
「俺は気にして無いから、それにもし気にしてると思うなら笑って

ろ。その方が楽しいだろ？」
思いもしない言葉に、思考が止まる。
けど・・・
「笑ってろ」そう言われたから・・・
慧音は、はにかんだ笑顔を浮かべた。

「それでいい。それじゃ帰るわ」
「さようなら、慧音先生」
「あぁ、さようなら」
手を振り彼らが出て行くのを見送る。
そして、見送ると
「笑ってろ・・・か・・・」
そう呟くと自然と笑みがこぼれてきた。
そして、そう呟くと同時に帰ったはずの人物が玄関から顔をのぞかせる。
「りゅ、竜一殿！？ど、どうかなされたのか？」
「ん？あぁ、一つ言いわすれてな。今度は来るときは俺が茶菓子を持ってくるよ」
そう彼が真面目な顔で言うものだから・・・
「・・・あぁ、楽しみにしているよ」
その返事を聞くと竜一は「楽しみにしてろよ」と笑いながら言うと、今度こそ帰っていった。

彼らの出て行った扉を慧音は静かにジッと見つめる。
「天草竜一・・・か・・・変わったやつだ。あんな態度で接してい

るというのに悪い気がしない。ふふ、ほんの少し話しただけなのにな。人のパーソナルスペースに簡単に入ってくる。本当に変わったやつだ。
それにしても・・・まさかその名を聞くとわな。見た目も性格も違うのにな・・・あいつそっくりなやつだ。まるで昔に戻ったみたいだ。それに・・・どこか彼女にも似ている・・・ふふ、まるであいつらの子供を見ている気分だ」
そう呟いた慧音の口元には小さく笑みが出来ていることには慧音自身気づいていなかった。

「さて・・・遅くなったが夕飯の支度をしなくてわな。早く仕度しなくては妹紅がうるさいからな」
そう呟くと、慧音は家の奥へと向った。

―To Be Continued―

夢の狭間編５　～配達×観察×２つの出会い～（後書き）

後半、竜一が勝手に暴走しやがった！
くそ・・・そんなお前が好きだ畜生！
さてさて、まさか人里パートをこんなにも長くなるとはとは・・・
２つでいけるかなって思ってたのに・・・ってか、前回のパート大分カットできたじゃん・・・ｏｒｚ
う～む・・・我ながらテンポ悪いな～（－ω－ｌｌ）
さて、相変わらずのｇｄｇｄ感ですが・・・次回物語が進みます！・・・と思う。
え？そんな伏線張りまくって大丈夫か？って？・・・・・・た、たぶん！

そして・・・カットで思い出した。
カットジーンズにはロマンがある！
ん？カットジーンズというよりショートパンツって言ったほうがいいのか？ホットパンツって言ったほうが正しいのか？
・・・・うん、ホットパンツだな！
これは２次だろうが３次だろうが通用するものがあると俺は思っている。
確かにミニスカニーソのようにちょっとだけ見えることも確かにいいと思う！いや、それはそれで全然ありだ！というか、好きだ！絶対領域は最高だと思う。
そして・・・たしかに、ホットパンツにはそれは無い。だけど、それとはまた違う魅力がある。
ジーンズから綺麗な脚がスラッと伸び、その白い肌が光を反射してキラキラと光るんだ！そして、お尻の形をこう・・・キリッ！って感じに見せる。
なによりクールに魅せるというか、エロカッコイイって魅力が込め

られていると俺は思っている。
うむ、書いていて自分でもよく分からないが・・・とにかく言葉では言い表せないものがあると思っている！
えぇい！説明なんて面倒だ！ググれば分かる！
ショートパンツ、ホットパンツ、カットジーンズ等でググれば出てくると思う！2次元がいいならイラストサイトで検索するば問題ない！

え？脚が綺麗だとは限らないだろ？
バカ野郎！そもそも脚に自身がない子がそんな装備で敵地に駆け出すとでも思っているのか！

そう、結論としては脚は最強ということだ！！！（ｉ・ω・｀）キリッ
そして、にゃんこさんは脚の綺麗なクールッ子が好きなんだということだ！

よし・・・今から願書とやらを書いてくるｗ
明日ってか、朝までに間に合うかな～（－ω－ｌｌ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0418o/

～東方永憑夢～

2011年5月23日14時13分発行